

# 国指定史跡 棚底城跡Ⅴ

## 平成29・30年度発掘調査 (第5・6次発掘調査)

2021

天草市教育委員会

国指定史跡棚底城跡Ⅴ  
平成29・30年度(第5・6次)  
発掘調査

天草市文化財調査報告書第9集

2021

熊本県天草市教育委員会

**国指定史跡 棚底城跡 V**  
**平成29・30年度発掘調査**  
**(第5・6次発掘調査)**

2021

天草市教育委員会





## 序 文

本書は、天草市唯一の国指定史跡「棚底城跡」において 2017（平成 29）年度及び 2018（平成 30）年度に実施した第 5 次・第 6 次発掘調査の成果をまとめた報告書です。

戦国時代の天草は、いわゆる天草五人衆が分割統治していました。天草五人衆とは大矢野氏、上津浦氏、栖本氏、天草氏、志岐氏のことです。彼らは大勢力である菊池氏、相良氏、大友氏、島津氏等の情勢を見極め、柔軟に対応しながら生き抜いてきました。

棚底城跡は上津浦氏と栖本氏が棚底地域の知行を巡って争った際の舞台として、相良氏の重臣が記した八代日記に記録が残っています。1544 年から 1565 年頃まで棚底を巡る抗争「棚底抗争」が繰り広げられたことが記録されていることから相良氏はその時期に天草地域の動向を気にしていたことが分かります。また、2002（平成 14）年度から 3 年間かけて旧天草郡倉岳町が行った発掘調査では、全ての曲輪で柱穴が見つかったほか、茶の湯道具、基石、海外産の陶磁器が出土しています。これらの成果をまとめた『棚底城跡Ⅲ・大権寺遺跡』を 2009 年 3 月に刊行し、その年の 7 月 23 日に肥後天草地域の政治・軍事の変遷を知る上で貴重な遺跡として国指定史跡になりました。

天草市教育委員会では、2012 年に『史跡棚底城跡保存管理計画書』、2017 年には『史跡棚底城跡整備活用基本計画書』を刊行し、2020 年には整備の基本設計を終え、整備に向けて動き出したところです。本調査で明らかになった成果が史跡整備をはじめ、様々な分野で活用されることによってふるさと天草への思いを深め、文化財に対する理解の一助となることを願います。

終わりに、調査の実施、指導等に多大なお力添えを賜った関係者、関係機関の皆様に深く感謝申し上げます。

2021（令和 3）年 3 月

天草市教育委員会 教育長 石井 二三男

# 本文目次

## 第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	1

## 第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

## 第3章 第5次発掘調査成果

第1節 第5次調査区トレンチ概要と出土遺構・遺物	5
第1項 調査の目的	5
第2項 T1701の調査成果	6
第3項 T1702の調査成果	12
第4項 T1703の調査成果	17
第2節 調査のまとめ	25
第1項 SD01の埋没年代について	25
第2項 T1702検出の通路と石積遺構	25

## 第4章 第6次発掘調査成果

第1節 第6次調査区トレンチ概要と出土遺構・遺物	28
第2節 T1805・T1805拡張	28
第3節 T1804	34
第4節 T1902	36

## 第5章 総括

第1節 第5次・第6次発掘調査成果の整理	39
第2節 史跡整備に向けて	40

# 本文目次

第1章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	1
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 第5次発掘調査成果	
第1節 第5次調査区トレンチ概要と出土遺構・遺物	5
第1項 調査の目的	5
第2項 T1701の調査成果	6
第3項 T1702の調査成果	12
第4項 T1703の調査成果	17
第2節 調査のまとめ	25
第1項 SD01の埋没年代について	25
第2項 T1702検出の通路と石積遺構	25
第4章 第6次発掘調査成果	
第1節 第6次調査区トレンチ概要と出土遺構・遺物	28
第2節 T1805・T1805拡張	28
第3節 T1804	34
第4節 T1902	36
第5章 総括	
第1節 第5次・第6次発掘調査成果の整理	39
第2節 史跡整備に向けて	40

## 凡 例

1. 本書は、平成 29 年度及び平成 30 年度に天草市教育委員会が棚底城跡調査整備事業として実施した棚底城跡第 5・6 次発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 報告書作成作業は令和 2 年度に実施している。
3. 調査の実施にあたっては文化庁国庫補助である歴史生き生き！史跡等総合活用整備事業を活用した。
4. 本書に掲載した座標は世界測地系に基づくものである。
5. 調査については、第 6 次発掘調査時に史跡棚底城跡整備検討委員会、文化庁、熊本県教育庁教育総務局文化課、熊本博物館、天草市立御所浦白亜紀資料館、山崎純男氏、中山圭氏の指導を受けた。
6. 発掘調査によって得られた出土遺物等は天草市文化財収蔵庫に保管している。
7. 本書の第 3 章の執筆は中山圭、その他の執筆と編集は宮崎俊輔が行った。拓本とトレースは森友李夏が一部行った。

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

天草市では、旧天草郡倉岳町（以下、旧倉岳町と称す）の頃より棚底城跡の測量調査・発掘調査に取り組んでいる。旧倉岳町の町史編纂事業の一環として平成14年度から始まった調査は当初、縄張り把握のための測量調査とI郭（主郭）の遺構の残存状況の確認のためのトレンチ調査を実施していた。この際に岩盤を鑿状のもので掘り込んで成形したと思われる柱穴等が多数確認され、遺構の存在が確認された。これを機に発掘調査を平成16年度まで実施し、I郭は全域、II～VIII郭はトレンチ調査を行った。平成21年7月23日には国指定史跡となり、平成23年度に『史跡棚底城跡保存管理計画書』、平成28年度には『史跡棚底城跡整備活用基本計画書』を策定した。これらに基づく史跡整備基本設計を行うため、平成29年度から遺構の確認を目的とする発掘調査を実施することとなった。

これまでの調査で全ての曲輪に岩盤を掘削した遺構が検出され、軟質の岩盤を加工・利用していたことが確認された。また、出土遺物は14～16世紀の幅であり、一般的な中世城跡に比べると貿易陶磁器が多く、土師器の比率が低いことが特徴として挙げられる。遺物で特に注目されるのは、石製風炉や天目碗等の茶の湯道具とベトナム産陶磁器である。これらの成果は熊本県内にはあまり類例がない。また、平成27・28年度に行った発掘調査ではI郭西部の横堀と土塁の延長が確認されるとともに、豎堀の延長も確認された。I郭にある土塁状の高まりは普請する段階で意図的に設けられていることも判明している。

## 第2節 調査組織

平成29年度(第5次)発掘調査

調査主体	天草市教育委員会
調査責任者	教育長 石井二三男
調査総括	文化課長 稲田正一郎
調査事務	文化課文化振興係長 赤星潤一
調査担当	文化課文化振興係主査 中山圭
発掘作業員	高田俊六、橋本仁志、村津俊信

平成 30 年度(第 6 次)発掘調査

調査主体	天草市教育委員会
調査責任者	教育長 石井二三男
調査総括	文化課長 稲田正一郎
調査事務	文化課課長補佐(文化振興係長) 村田清也 文化課文化振興係参事 松本博幸
調査担当	文化課文化振興係学芸員 宮崎俊輔
調査指導	【史跡棚底城跡整備検討委員会】 鶴嶋俊彦(委員長・熊本城調査研究センター)、歳川喜三生(副委員長・天草市文化財保護審議会)、稲葉継陽(熊本大学永青文庫研究センター)、山尾敏孝(熊本大学大学院)、田中哲雄(日本城郭研究センター)、堀川昭三郎(倉岳まちづくり協議会)、 稲津千明(棚底地区振興会) 【文化庁】五島昌也、近江俊秀 【熊本県教育庁文化課】木村龍生、池田朋生 【熊本博物館】南部靖幸、清水稔、山口均 【天草市文化財保護審議会】山崎純男 【天草市立御所浦白亜紀資料館】廣瀬浩司、黒須弘美 【天草市世界遺産推進室】中山圭
調査協力	【天草市倉岳支所】福本英樹 【天草市防災危機管理課】出崎和也
発掘作業員	駒崎隆義、中田保男、橋本仁志、村津俊信、森内健二

令和 2 年度発掘調査報告書作成作業

作業主体	天草市教育委員会
作業責任者	教育長 石井二三男
作業総括	文化課長 丸林眞吾
作業事務	文化課課長補佐(世界遺産・文化財係長) 村田清也 文化課世界遺産・文化財係参事 松本博幸
作業担当	文化課世界遺産・文化財係学芸員 宮崎俊輔
作業助手	文化課世界遺産・文化財係主任 中山圭 文化課世界遺産・文化財係会計年度任用職員(学芸員)森友李夏 文化課文化振興係会計年度任用職員 岩見佳子

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

棚底城跡は熊本県天草市倉岳町棚底字尾崎所在の中世城跡である。天草市は熊本県の南西部に位置し、東シナ海・有明海・八代海に囲まれた大小 120 程度の島々で構成されている。倉岳町は天草上島の南側にあり、天草市最高峰の倉岳を有する。冬には通称「倉岳おろし」と呼ばれる非常に強い北風が吹くことで知られ、麓の棚底地区には算木積みで防風石垣が組まれた独特の集落景観が広がる。棚底地区は扇状地であるため、大型の礫が豊富に取れ、水はけが良い。

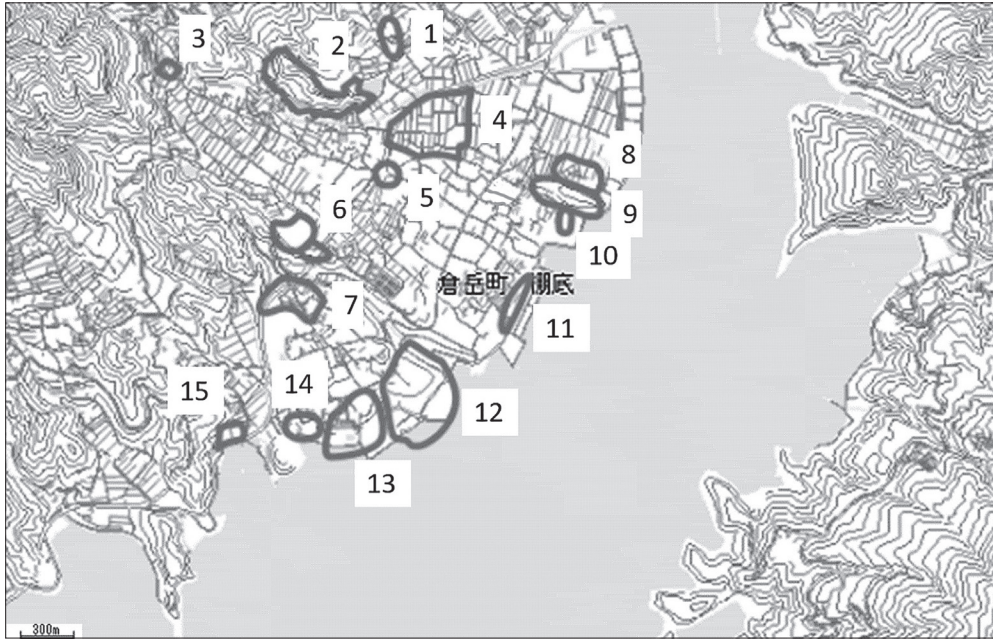
気候は温暖で、平均気温は例年 17 度前後であり、冬場の平均気温も 10 度前後にとどまっている。降雨は概して少なく、県内で降水量の多い阿蘇や人吉地方とは対照的である。

### 第2節 歴 史 的 環 境

棚底城跡周辺は図 1 に示すように現在の海岸沿い及び国道沿い、山間部にそれぞれ分布が集中している。縄文時代の遺跡が多く、広い範囲に分布している。また、市指定史跡「宮崎石棺墓群」のように古墳時代の遺跡も散見され、中世に属すと考えられる遺跡は棚底城跡のほかには大権寺遺跡と八竜遺跡のみとなっている。しかし、棚底地区の住民によれば畑からよく茶碗の破片が出るという話もあることから、現在の集落と中世の集落が重なっている可能性もあることは留意しておきたい。いずれにせよ、棚底城跡周辺の遺跡については発掘調査等が行われていないため、不明な点が多い。

中世については、大権寺遺跡が重要となる。従来から石塔記年銘として天草最古となる延文 3 年（1358）をもつ石塔部材を筆頭に多数の石塔残欠があることで知られ、棚底城跡の築城主体と関わる可能性をもつ遺跡である。また、棚底城跡と扇状地を挟んで向かい合う西側丘陵部は地元では「城山」と呼ばれている。明確な遺構は確認できないが頂上部のみ削平されている。倉岳町所在の明確な城跡としては、宮田城跡や名桐城跡がある。宮田城跡には堅堀、土橋等の遺構が良好に残っており、表面採集された陶磁器から 15 ～ 16 世紀後半に比定されよう。名桐城跡は全長 350m に及ぶ細長の縄張りで、東西に走る尾根上に連続する 3 つの丘を主要な曲輪として削り出し、周囲に堅堀を施している。名桐城跡の近くには「家久栄」という地名があり、八代日記に記載のある「藤河榕」と関係すると考えられている。今後の位置特定が重要な地域である。これらの城跡は棚底城跡に隣り合っており、上津浦氏及び栖本氏による棚底を巡る抗争の中で機能していたと思われる。





- 1. 吉野遺跡   2. 棚底城跡   3. 大権寺遺跡   4. 山仁田遺跡   5. 歳川遺跡
- 6. 毛首遺跡・浦川遺跡   7. 塔尾遺跡   8. 房崎遺跡   9. 宮崎石棺群   10. 宮崎遺跡
- 11. 八竜遺跡   12. 曙遺跡   13. 小崎遺跡   14. 下塔尾遺跡   15. 小鳴遺跡

図 1：棚底城跡周辺の遺跡分布

近世になると、豊臣秀吉による九州征討後には小西行長の下に置かれた。いわゆる天草五人衆（天草氏・大矢野氏・上津浦氏・志岐氏・栖本氏）と小西行長の間で天正 17 年（1589）に勃発した通称・天正天草合戦を経て、改めて小西行長の統治下におかれ、在地領主として地域支配を行うこととなった。文禄・慶長の役にも参戦するが、中世に導入されたキリスト教が諸島全域に拡大し、コレジヨの誘致等が行われている。しかし、棚底周辺についての歴史は詳らかでなく、隣接する宮田村までは栖本氏がキリシタンになった影響で宣教が行われたことまでしか分かっていない。

### 第3章 第5次発掘調査成果

#### 第1節 第5次調査区トレンチ概要と出土遺構・遺物

##### 第1項 調査の目的

第5次発掘調査は、I郭切岸を圍繞する横堀と土塁（それぞれ上段と下段がある）の規模、構造、埋没年代の確認を目的として、T1701～T1703の3か所のトレンチを設定し、掘削を行った。

I郭周囲の横堀・土塁の発掘調査は、平成15年度の第1次調査において、「1-a・1-b」の2本の直交トレンチを設けて実施され、横堀・土塁の断面構造と、I郭東から北東への連続が確認される大きな成果を得た（倉岳町教委2005）。当該報告書では、

- ・上段横堀は上端幅3.6m・下端幅1.2m・深さ1.7mの規模。
- ・横堀は、土塁を取り崩して、大がかりな埋め戻しが実施された。
- ・破城に伴う行為。

と報告されている。このことから、土塁の取り崩し・横堀の埋め戻しは、概ね16世紀末（廃城後）以降と考えられてきた。しかし、横堀埋土中の出土遺物は、当時実施されたI郭の発掘調査の出土遺物等と峻別されておらず、詳細な埋め戻し年代は不明であった。また当該トレンチ調査で判明した土層断面図は、

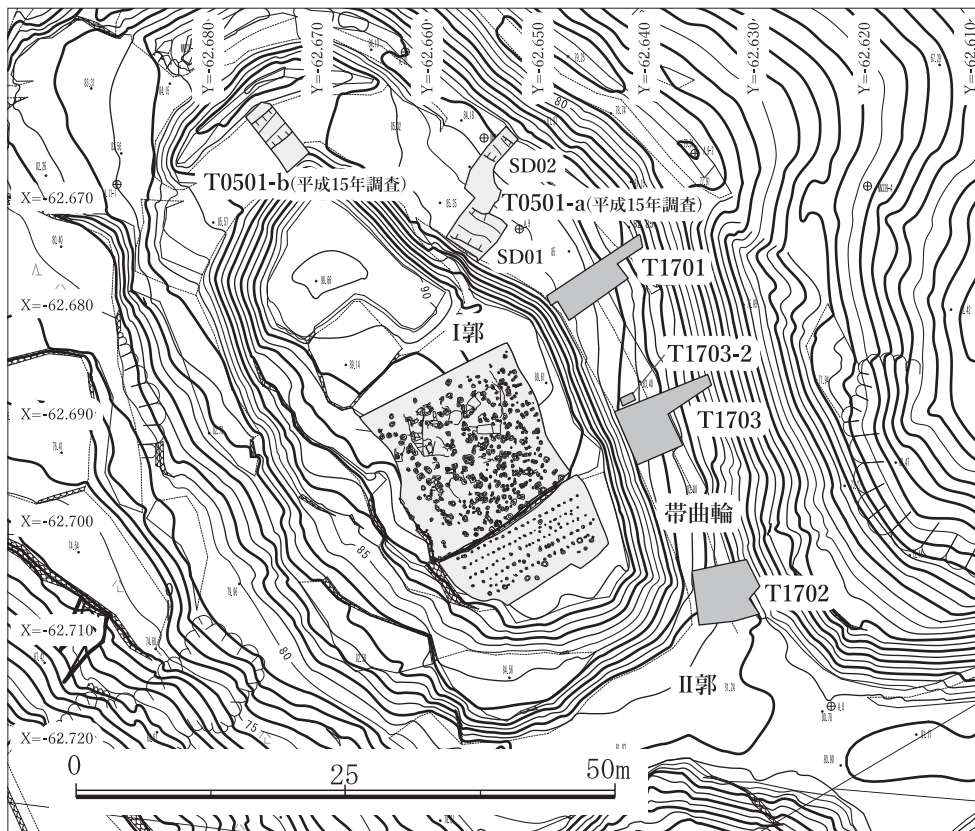


図2：第5次発掘調査トレンチ配置図

上段から下段にかけて、同一壁の一連の図面として作成されなかったことから、客観的に図面からは、横堀と土塁の構造が把握しにくい点にも課題が残った。

以上のような課題を解決するため、また、旧調査では確認できなかった横堀・土塁のⅠ郭東部からⅡ郭へ向けての延伸状況及び終末点の確認のため、第5次調査を実施することとした。

調査はT1701・T1703については、横堀・土塁に直交する方向の調査区を設定し、T1702はⅡ郭曲輪面北端と帯曲輪部の接続地点を中心に調査区を設けた。

調査結果として、部分的な確認ではあるが、棚底城跡ではⅠ郭周辺の横堀について、廃城後ではなく、城郭が運用されている期間中に土塁の取り崩しと横堀の埋設を行い、帯曲輪を通路化した可能性が高いことが確認された。

調査終了間際に実施した発掘調査現地説明会では、約90人の参加者があった。

## 第2項 T1701の調査成果

### 1. 遺構

T1701は、平成15年の1-a（以下、T0501-a）から、南に約10m離れた地点に設けたトレンチである。T0501-a同様、やはり上段・下段いずれにおいても横堀が検出され、特に上段横堀の壁面は地山である岩盤の削り落としであることが確認できた。本報告では、上段横堀をSD01、下段横堀をSD02としておく。

上端横堀SD01の幅は3.3mを測る。深さ約2.1mで堀底を検出し、堀底は幅0.9mの通路状をなし、T0501-a同様の箱堀形状であることが追認された。堀の北東側に接することとなる土塁は、その基底部に該当すると思われる地山が、表土下約10cm程度の深さで検出された。人為的な土塁の積み土は確認できず、本来あった積み土層はすべて削平され、SD01の埋め土として利用されたとみられる。

明確な土塁積み土層が確認できなかったため、土塁基底部の幅は确实ではないが、地山の検出状況と傾斜から、概ね幅1.5～2.0m程度と考えられる。

本来あった土塁の高さは想像の域を出ないが、Ⅰ郭北側の帯曲輪カーブ部分で現在も残存している土塁の高さが、現地表面から概ね1.2m程度の高さであり、また、検出された幅約3m・深さ約2mの横堀を埋めるだけの土量であったことから、1～2mほどの高さで推定をしておきたい。

Ⅰ郭切岸に接する、トレンチ南側では表土であった1・2層の下部から削平された岩盤層が検出された。その幅は、おおよそ1.4mほどになるので、Ⅰ郭切岸直下で、SD01に付随する犬走りと考えられる。

そこから岩盤は急激に傾斜を進め、SD01を形成するが、調査中4層の岩盤落ち際から、景德鎮窯系白磁皿（図5-4）と瓦質土器火舎の大振り破片（図5-10）が出土した。横堀の南北肩部を確認しつつ、掘削深度を下げていったところ、9層

中より、黒褐釉四耳壺片（図 12-53 の一部）と瓦質播鉢片（図 5-8）が出土した。9 層上面で、明瞭な遺構は確認できなかったものの、4・9 層は中世段階の遺物しか見られない状況であった。

トレンチ内 SD01 の堆積層には、遺物は少なかったが土器粒と炭化物は全般的に含まれており、近世的な様相は看取できなかった。11 層からは龍泉窯青磁片（図 5-11）、12 層もしくは 14 層あたりで土師器坏や皿（図 15-13～15）が出土し、堀底に至るまで、近世遺物の出土は見られなかった。

下段への落ちに近い部分の、表土層（1 層）から、壁面にひっかかる形で、肥前陶器銅緑釉皿（図 5-1）の破片が出土しているのも、表土層の形成は 18 世紀以降であろう。

下段部では、幅約 1m 程度の堀（SD02）を検出したが、2 層下の検出面から、堀底までの深さは 30～40 cm 程度であり、堀というよりは溝に近い。底部はほとんど幅がなく、形状としては薬研堀的ではある。堀の埋土中には、20 cm 程度の扁平石が含まれており、それらを除去すると堀底に至った。景德鎮窯系青花碗（図 8-16）が、この扁平石直上で出土している。SD02 埋没時に含まれた遺物と考えられる。

付属する土塁は、やはり地山の削りだしと思われるが、検出幅約 40 cm 程度で、検出された土層の表面は割合平坦になっていた。ただし、トレンチ北端部は樹根により攪乱され、土塁形成層の攪乱部に含まれていたのも、実際の土塁幅は、検出幅よりは広いものと想定される。

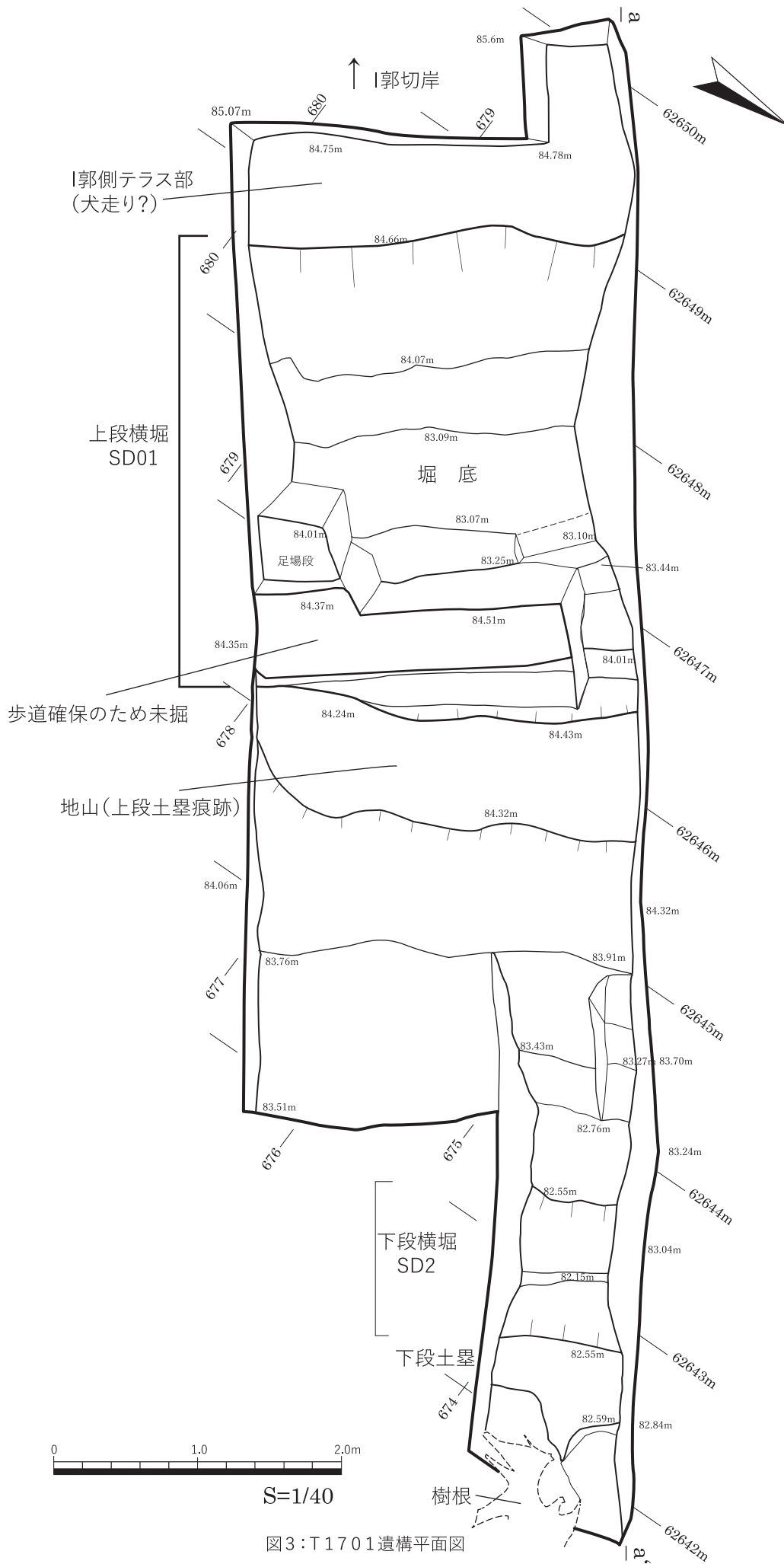


図3:T1701遺構平面図



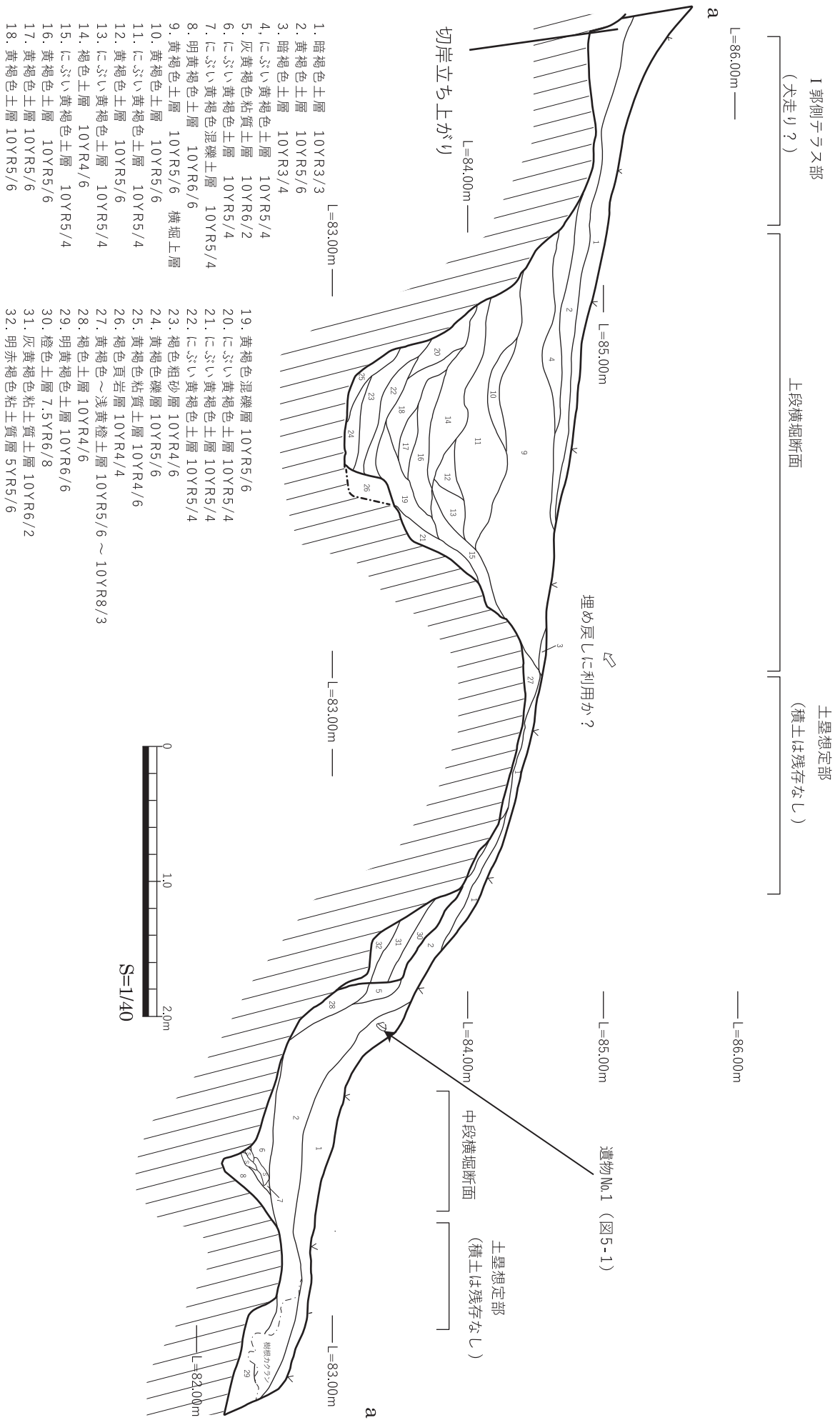


図4: T1701 土壘断面図

## 2. 遺物

T1701 からは、1～18 までの遺物が出土した。うち、2～10 はほぼ上段の表土もしくは9層までに出土したものである。

1 は肥前系銅緑釉の内湾皿で、外面はベージュ、内面は緑色である。内野山窯産で18世紀以降のものであろう。2 は龍泉窯系青磁碗で、高台内部を露胎とする。3 は龍泉窯青磁の稜花皿。4・5 は景德鎮窯系白磁の端反皿で、いわゆるE群皿である。15世紀後半～16世紀。棚底城跡ではポピュラーに出土する。6 はタイ産の黒褐釉陶器片で、シーサッチャナライ窯の生産品と想定される。図12-53 は第5次調査で出土した破片を接合したものであるが、そのうち、耳部破片と胴部破片の2点がT1701から出土しており、ほぼ6と同レベルで出土した。出土層位は9層。7 は縦格子の文様を有する瓦質土器で、火舎か風炉と考えられる。8・9 は瓦質播鉢。8 はやや灰色で口縁部が肥厚する。6などのタイ陶器片の付近から出土している。9層出土。9 は、口縁端がやや外側に向かって突出するタイプ。10 は、瓦質播鉢で、重量感がある。口唇部を平坦につくる。4とセットで、4層から出土している。

11～15 は、SD01 の埋土中、10層以下から出土した遺物である。11 は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、やや玉縁状になる。沖縄分類（瀬戸他 2007・瀬戸 2016）でⅣ～Ⅴ類に位置付けられ、14世紀中葉～15世紀中葉の遺物と考えられる。13 は口縁部を薄く鋭く摘み上げるタイプの土師器坏で、棚底城跡での出土例は少ない。天草市船之尾町の本渡城跡で大量に出土している。14・15 は土師器皿。14 は口縁部を薄く尖らせ、13とセットになるタイプと思われる。

16～18 は T1701 下段から出土。16 は景德鎮窯系青花碗の口縁部破片。外面に草花文、内面口縁部付近に圏線 2 条が見られる。口縁の一部が凹む。おそらく C 群蓮子碗。17 は 6 層直上で出土した土師器皿。粗雑な糸切痕から、胴部は外反しながら立ち上がる。器壁はぼってりと厚い。18 は口縁部を平坦に折る素焼きの陶器で、無釉。外面胴部は斜方向のナデ痕跡が明瞭に見られる。出土層位は 2・6 層の境界あたり。

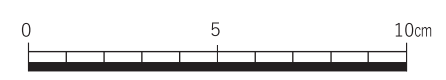
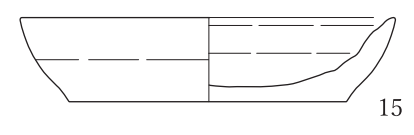
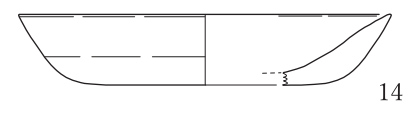
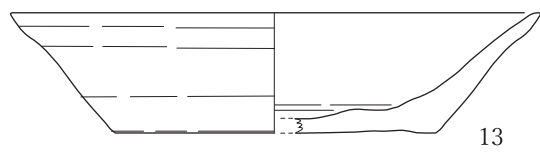
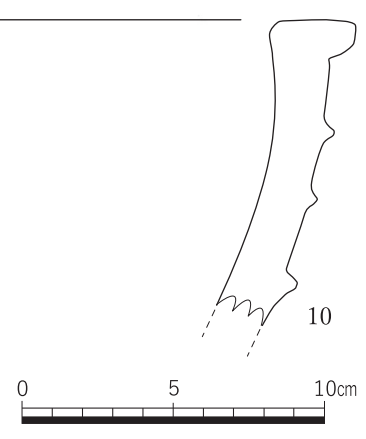
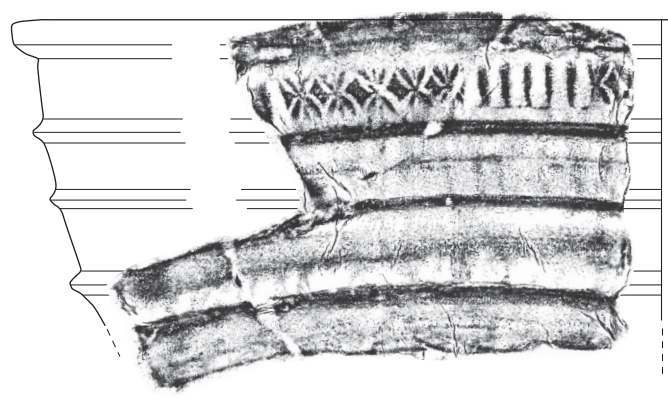
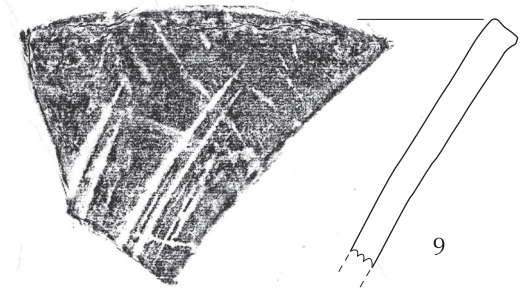
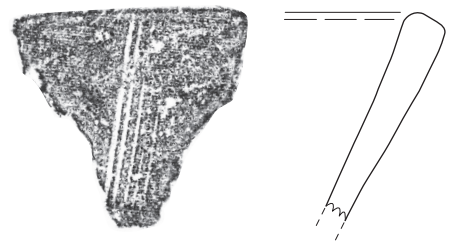
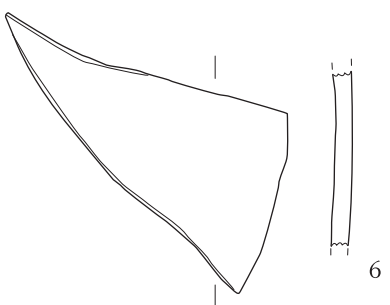
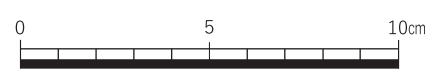
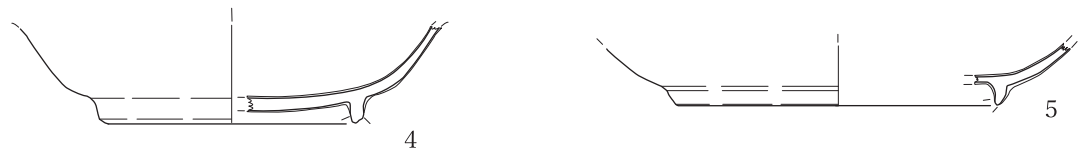
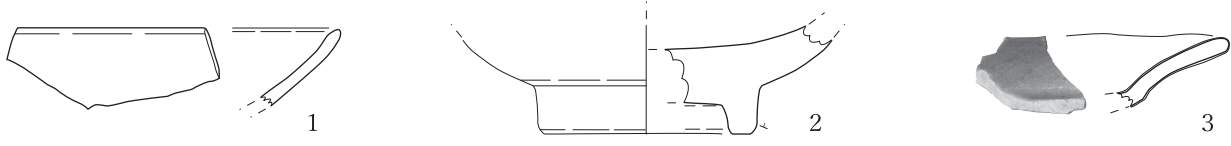


图5:T1701遺物実測図



### 第3項 T1702の調査成果

#### 1. 遺構

T1701でSD01・SD02の存在を確認したため、これらの終末点が重要になった。また、Ⅱ郭曲輪面から帯曲輪へ進入する道は、現在も一般通路として利用されているが、Ⅰ郭切岸の裾部が東に張り出してきているため、北側崖面との間は極めて狭小な通路空間になっている。このため、幅の狭さから土塁痕跡なども見られずSD01が残る可能性は低かった。城外側も崖面となり、SD02の存在も考えにくい状況になっている。

このような状況から、Ⅱ郭曲輪面と帯曲輪の接続部を確認するために、T1702をおおよそ4m四方の正方形に設定して掘削した。

トレンチ北西角周辺は、掘削後すぐ岩盤が露呈した。岩盤は南西に向かって傾斜しており、人為的なものか自然の傾斜かは判断がつきがたい。ただ、このことからT1702では、SD01は存在しないことが明らかになった。岩盤の南端は、突堤状に残っており、これは人為的な削平と判断できた。この突堤から、さらに南側は、おおよそ2m四方の平坦面になっており、Ⅱ郭の曲輪面と判断できた。曲輪面には、小ピット2基を確認しているが、検出だけでとどめており、性格は不明である。岩盤削平による曲輪面から東は、緩やかに下降するが、一段下は、盛り土により整地された曲輪面となっていた。岩盤削平面・盛り土整地面はいずれもⅡ郭曲輪面の北端を形成するものと考えられる。

盛り土整地面の北側崖際には、粗い砂岩の石が4石分、掘削以前から視認できていたが、発掘の結果、この石は曲輪端の列石であることを確認している。

調査区北西の岩盤の傾斜を追う形で、掘削を進めると、北半中央部が平坦になっている状況を確認した。北壁の4層・8層の面である。これらが通路として利用されていたものと考えられるが、その幅は40～90cmと非常に狭い。通路部を検出している段階で、通路城外側に石が多数埋まっている状況に気づいた。これらの石材は、城外の棚底集落から持ち込まれた、いわゆるヒン岩で、棚底集落に現在も数多く残る民家外周石垣の構成材である。曲輪端列石がおそらく城内に産出する砂岩であるのに対し、通路外側にみられる石材はほぼすべて安山岩系ヒン岩で、それも多くは城外側に傾斜させて設置されている状況が看取された。そのうちの1石は、中央部に刻線を伴っていた。ヒン岩は、硬質の火成岩であり、石材の性質から、節理等による自然の刻線とは考えにくいいため、この線は設置時の割り付け線や基準になるものと推定している。

このため、城外側の斜面部も掘削を行い、数多くの石材が残存している様子を確認した。人為的な石積遺構であるが、必ずしも、石材だけの組み合わせで構成されているわけではなく、土と一緒に構築されている様相がうかがえる。また、石材同士が積み重なっている場所もあれば、石材が見られず、空隙のよ

うになっている箇所もある。しかし、全体的に城外側へ向けて石材を、人為的に配置していることは間違いない。この石積遺構の性格は、判然としないが、棚底城の本城にあたる上津浦城跡の発掘調査で城外側の崖面付近に石積を設けた遺構が検出されており、類例と考えられよう。上津浦城跡の遺構でも石材と石材の間に土が挟まっている部分も存在していた。おそらく城外側崖面（法面）の補強という意味合いが強いのであろう。T1702 の遺構も通路部が狭小になっている部分での施工が確認できるため、やはり法面の補強として築かれたものと見ておきたい。

構築年代についても明確ではないが、石積遺構に伴う遺物として瓦質播鉢片（図 8-28）が出土しており、中世の可能性は高い。石積遺構周辺の、特に低部付近から漳州窯系青花などが数点出土している。

石積遺構は、さらに北側の調査区外に延伸し、また高さもさらに底層まで残存しているものと推定されるが、調査時の安全性担保からこれ以上の掘削は行わなかった。

## 2. 遺物

T1702 から出土した遺物は、19～30 までである。Ⅱ郭曲輪面・通路部・岩盤傾斜部からの遺物出土はほとんど見られず、ここに掲載した遺物もすべて、石積遺構付近及び石積遺構覆土から出土したものである。

19 は口縁が若干外反する龍泉窯系青磁皿の破片である。20 は龍泉窯系青磁の小型香炉である。被熱を受けており、表面は荒れている。内面は口縁部付近以外は露胎となる。21 は景德鎮窯系青花の端反碗。非常に薄くつく。外面に人物文が見られる。22 は漳州窯系青花碗である。外面・内面とも口縁部付近にやや太めの圈線をめぐらせ、口縁は直口。16 世紀中葉～後半。23 も漳州窯系青花で皿の可能性もある。高台は直線的な断面方形で、釉は高台途中までかかり、畳付・高台内は無釉になる。16 世紀後半頃か？ 24 は、肥前磁器の初期伊万里皿と思われる。畳付を除き総釉。見込みは焼成時についた釉剥げが多くみられる。17 世紀前半。石積遺構被覆土層から出土。25 は中国褐釉陶器壺の破片。内外面とも、規則的に凹凸が残るので、沖縄分類 V 類の陶器と考えられる。棚底城跡で多数の破片が確認される。ただし、本例は器壁も薄く、やや小型のタイプと推定される。26 は土錘。27 は土師器皿。外面の糸切部から外反しながら立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。28 は瓦質播鉢。石積の間に挟まるような状況で出土している。29・30 は、須恵器質の甕片。いずれも外面を格子叩きし、内面は丁寧にナデ消している。天草周辺では普遍的に出土するが、詳細な産地は不明。

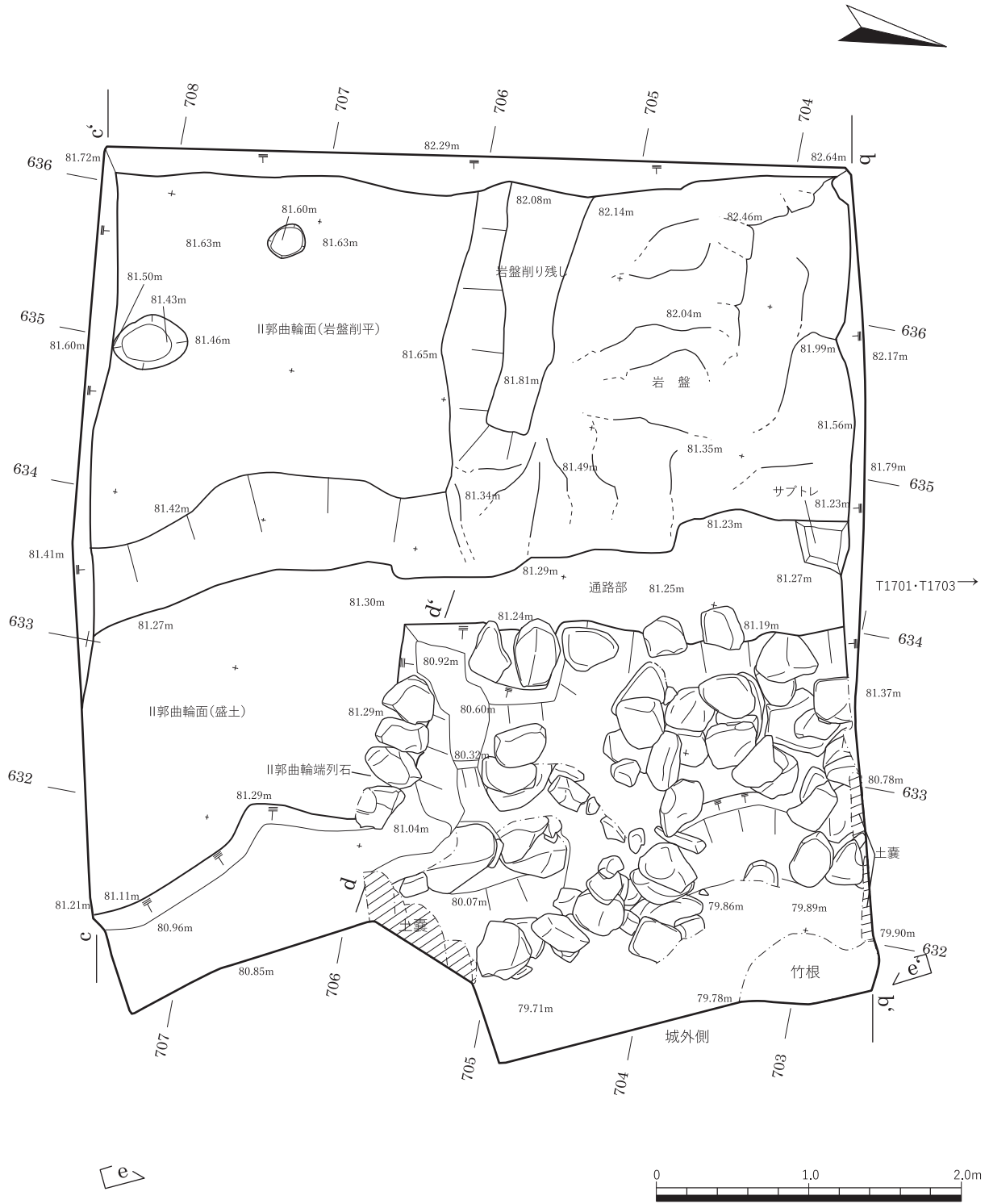


図5 T1702遺構平面図

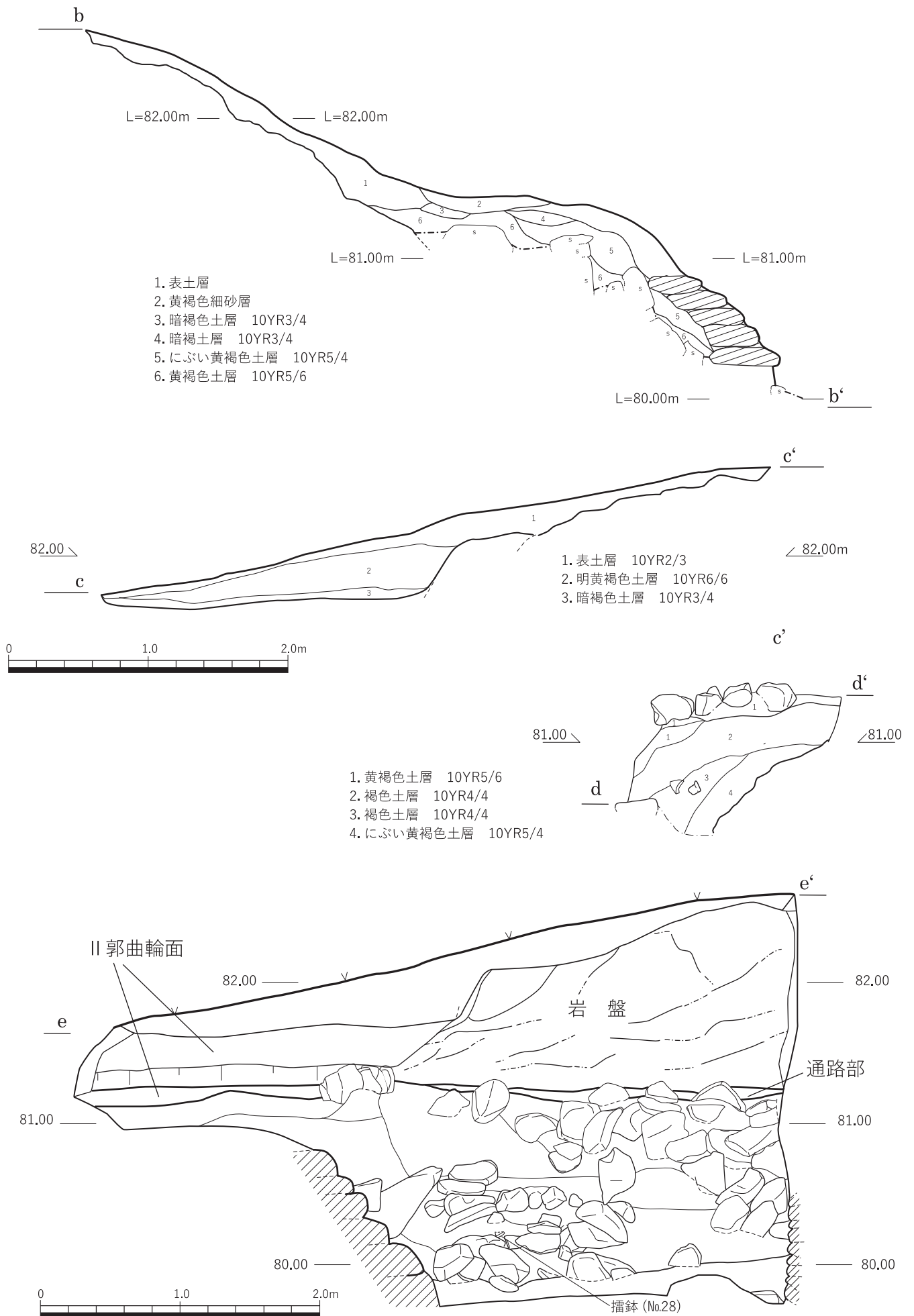


図7：T1702 土層断面図・石積遺構見通し図

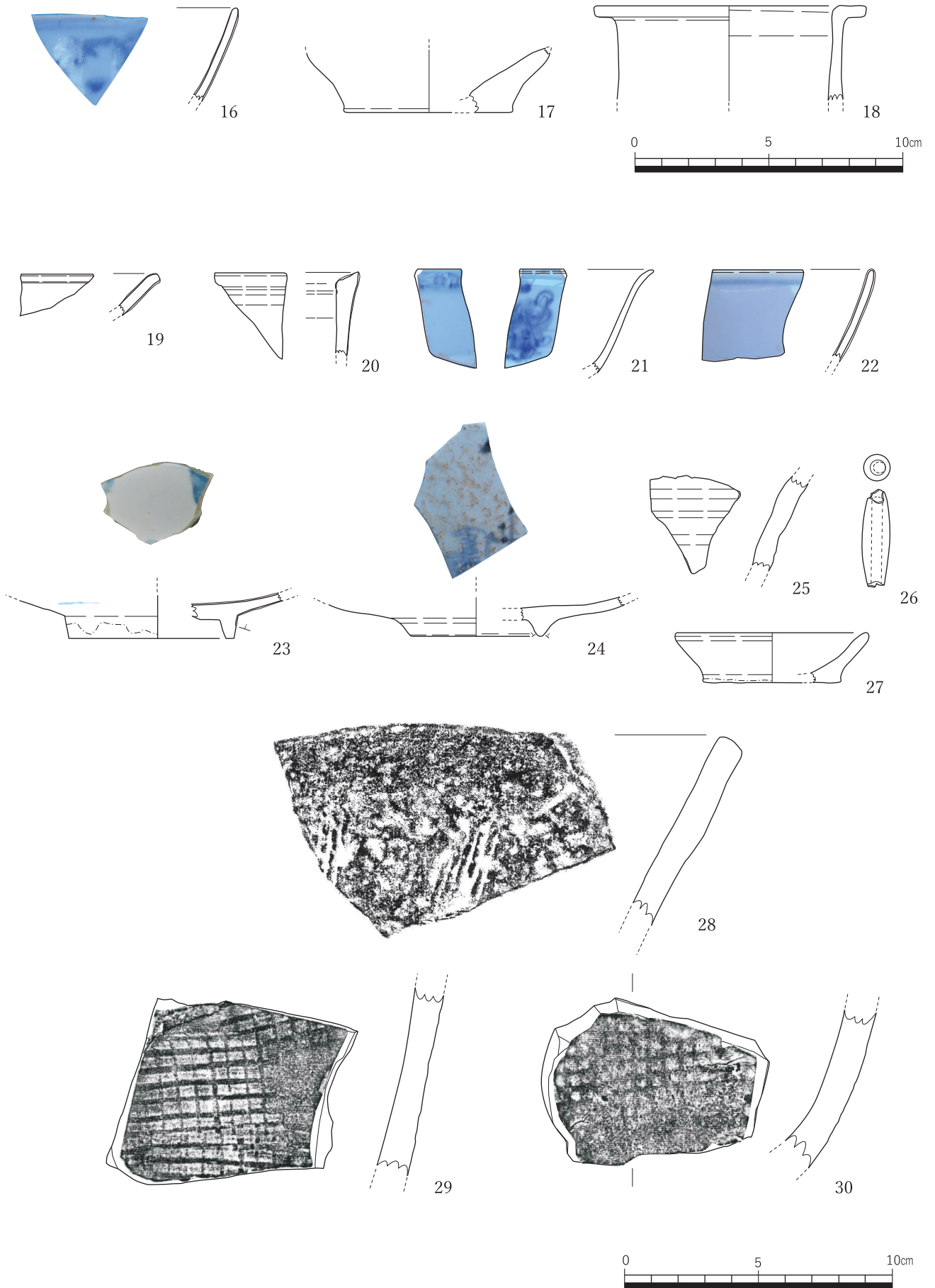


图 8 : T1701 · T1702 遺物実測図

#### 第4項 T1703の調査成果

##### 1. 遺構

T1701 から南側へ約 15m離れた場所に、帯曲輪に直交する形でトレンチを設けた。一部は長く伸ばし、下段の状況を確認できるように設定した。

I 郭側の切岸麓部からはやはり岩盤を削平した面が確認でき、T1701 に存在した犬走りが T1703 にも存在することが確認された。上段掘削中、トレンチ北壁付近に、黒褐釉陶器破片が集中して出土し、やはりタイ産の黒褐釉壺であることが確認できた。出土層位は北壁 12 層の直上あたりで、表土からの深さは 20 cm 程度であった。同様の破片はトレンチ内の中央の硬化土付近、また南側のトレンチ壁付近にも散布していた。T1701 からは 3 点であったが、T1703 からは、大小含め約 25 点ほどが出土し、合計で 30 点ほどの破片が確認できたことになる。さらに第 6 次調査で設定した、T1805 からも出土しているので、タイ黒褐釉陶器壺の破片は、棚底城跡 I 郭北側の帯曲輪面の広範囲にわたって散布している状況が明らかである。すべてが同一個体かどうかは不分明であるが、T1701 と T1703 の破片が接合している事例もあるので、多くは同一個体に含まれると推定している。

T1701 同様、タイ黒褐釉陶器の出土が比較的浅い深度からであり、また、各調査区に散布していることが判明したことから、SD01 の確認を目的としつつも、やや慎重に掘り下げたところ、トレンチ南側の、現歩道近くで、小礫による列石遺構を検出した。列石は 15 cm 程度の小型石材を並べたもので、2 条確認され、2 条の間隔は約 80 cm であった。列は帯曲輪の主軸や SD01 に平行している状況であった。列状に並ぶ延長は約 120 cm の区間のみで、トレンチ中央部では動かされて列状を呈していなかった。しかし、列石遺構周辺に硬化した土層がみられ、トレンチ中央部にも同様の硬化部と動かされたと思われる石材が至近にみられるため、なんらかのセット関係にあったものと推測される。この列石遺構周辺からは、31 の青磁雷文帯碗をはじめ、34 の青磁細線蓮弁文碗、35 や 36 の青磁片、37・38 等の白磁皿・39 の青花人形文碗片等、主に 15 世紀後半から 16 世紀頃の遺物が出土したことから、この列石遺構は棚底城に伴う遺構と判断された。

このため、T1703 では、石列遺構検出面を遺構面と考え、SD01 の確認については、列石遺構などに影響しない部分のみを部分掘削する手法で実施した。具体的には北側壁面付近で土塁側からの落ち際、南側壁面で犬走り側からの落ち際の 2 か所をサブトレンチとして掘削した。この結果、いずれの際でも横堀の落ちを確認したことから、SD01 は T1703 より南まで延伸していることが確実となった。

しかし、SD01 が埋没した後に形成された面に、列石遺構等が検出されたこ



とから、SD01 は少なくとも廃城後に埋めたものではなく、棚底城利用時に埋められ、表面は石列等を伴う帯曲輪面として機能していたことも判明した。石列遺構付近の遺物から 15 世紀後半頃にはすでに SD01 は埋められており、新たな帯曲輪面を利用する中で各陶磁器破片やタイ陶器破片が散乱したものと思われる。SD01 の埋没年代の詳細な検討は次節で行いたい。

T1703 のうち、現歩道として利用されている城外側の幅 1m 程度の範囲は、基本的に未掘でとどめたが、トレンチ北壁・南壁部のみ、横断土層を確認するため、掘削を行った。南側壁面付近では、ごく浅い南壁 4 層から、景德鎮窯系青花 C 碗（図 11-40）及び同瑠璃釉小片（おそらく碗・図 11-45）が出土し、15 世紀後半以降の帯曲輪面の形成を裏付ける状況になっている。北壁部分では、現歩道の下に土塁位置が来ると考えられたため、壁面土層を確認できる分のみ掘削を行った。その結果、表土下（現歩道面）約 40 cm の深さで硬化した土層に当たり、この層は一部に炭化物や土器粒を含んでいたもので、地山ではなく土塁積み土層が残存しているものと判断した。ただし、東西への傾斜面は地山が顕著なので、土塁積み土層は、最下層のみが残っている状態と判断している。

土塁の城外側傾斜部から下段部を被覆する層中、2 層から漳州窯系青花碗（図 11-41）が出土している。おおむね 16 世紀後半の遺物と考えられる。1 点の出土だけで断定できないが、T1702 の石積被覆土に漳州窯系青花が数点出土している点を併せて考えると、城外側の傾斜部は、城の機能が終わった 16 世紀後半～17 世紀前半にかけて埋まっていったものと推測される。

下段部では、SD02 の延長が想定された北壁 8 層下の層から、上段で確認できたものとよく似た列石遺構がやはり 2 条分確認された。検出幅は、トレンチ幅と等しい約 60 cm で、2 条の間隔は約 70 cm であった。列石遺構に伴って、74 の青花 C 碗・77 の青花端反皿が出土し、また周辺の土層から、70～73、75、76 の遺物が出土している。下段も列石遺構が検出されたため、掘削はそこで止めたので、列石遺構の下部にあると想定される SD02 と付属する土塁の状況は未確認である。周辺の遺物から、下段においてもやはり 15 世紀後半～16 世紀前半頃に、列石とその面が機能していたものと判断される。

## 2. 遺物

T1703 出土の遺物は、3 か所のトレンチでもっとも多く、また、極めて限られた範囲の掘削となった SD01 埋土層からも、一定量の遺物出土がみられた。出土遺物は 31～78 まであり、31～53 までは上段表土から列石遺構面までの出土遺物、54～69 は SD01 埋土層中の遺物、70～78 は下段部出土遺物である。

31 は龍泉窯系青磁の雷文帯碗破片。沖縄分類 V 類で 15 世紀前半～中葉の資料。32・33 は龍泉窯青磁の無文直口碗。33 は胎土が灰色で、釉色は白みを帯びる。

34 は龍泉窯系青磁の細線蓮弁文碗の腰部と考えられる。沖縄分類Ⅵ類。35 は龍泉窯系の皿か？外底は無釉部が多い。36 は龍泉窯系青磁の盤か皿。内面に鎬文がある。外面は無文。37 は華南系と思われる白磁皿。白色失透釉がかかり、外底高台よりにヒビが入る。38 は白磁 E 群皿。39 は人型文を持つ青花碗。列石遺構付近から出土。40 は青花 C 群碗口縁部。トレンチ南壁の現歩道の直下から出土。41 は漳州窯系青花碗。やや浅めの器形で、外面には三角模様を施す。高台付近は露胎で、高台断面は方形になる。C 群碗の粗製品か。42 も漳州窯系碗の破片。他に同文様の破片が 1 点出土している。43 は、漳州窯系青花の大皿と考えられ、高台に多数の砂が付着している。高台が直線的であり、方形になる可能性もある。列石遺構と同じ検出面から出土。16 世紀後半か。44 は天目茶碗の口縁部片。中国産天目。45 は景德鎮窯系瑠璃釉碗片。特徴的な部位ではないが、重要であるため掲載した。棚底城跡からの瑠璃釉の出土は初めてで、県下でも出土例は希少と思われる。46 は洪武通宝。T1703-2 とした追加トレンチから出土している。47・48 は土師器坏。48 は薄く仕上げる。49 は瓦質火鉢。T1703-2 から出土。50～53 は、タイ黒褐釉陶器四耳壺である。T1701 の破片も含めて、接合するものを 53 として復元した。50～52 は接合しなかったが、53 と釉調・胎土が近いため、もともとは同一個体の可能性が高い。52 は内外面とも無釉であるため、壺底部付近の破片と考えられる。50・51 はタイ陶器集中部から、52 はそこよりやや切岸側で出土。

54 は、龍泉窯青磁碗Ⅰ類で 12 世紀後半～13 世紀前半頃の遺物である。天草の城館遺跡では、おおむねどこでも、中世前期の貿易陶磁器が数点出土する傾向にある。北壁付近 13 層出土。55 は龍泉窯青磁薄釉端反碗。色調は深緑色。北壁付近 14 層出土。沖縄分類Ⅳ類もしくはⅣ'類で 14 世紀中葉から 15 世紀初頭頃。56 は龍泉窯系青磁端反タイプ口縁。端反り部の屈曲は弱い。皿になる可能性もある。Ⅴ類か。57 も龍泉窯系青磁の端反破片だが、玉縁状になる。沖縄分類Ⅴ類。58 は玉縁状の口縁部。Ⅴ類。南壁の深堀部出土。59 は無文青磁碗の腰部。14 層出土。60 は、無鎬蓮弁文の破片。沖縄分類Ⅴ類か。南壁付近の深堀部出土。61 は備前焼播鉢の口縁部。玉縁部の下縁がやや突出するタイプで、玉縁の肥大化以前の様相を示す。天草においては備前焼の播鉢の出土例は極めて少ない。北壁 14 層出土。62 は中国製天目茶碗。口縁部は外側斜め方向に削られ刃先状断面を呈す。胎土は灰白色。北壁部 12・14 あたりの層位で出土。63～65 は土師器。64 はやや内湾する。64 は 13 層出土。66 は土錘。やや歪な成形。67・68 は銭貨。67 は「淳化元宝」で鑄造年代は 990～994 年。68 は文字判別不可。63・65～68 は、足場段掘削時に出土しており 15～17 層あたりの層位からの出土になる。69 はウシの歯。55 の近くから出土し、北壁 14 層。



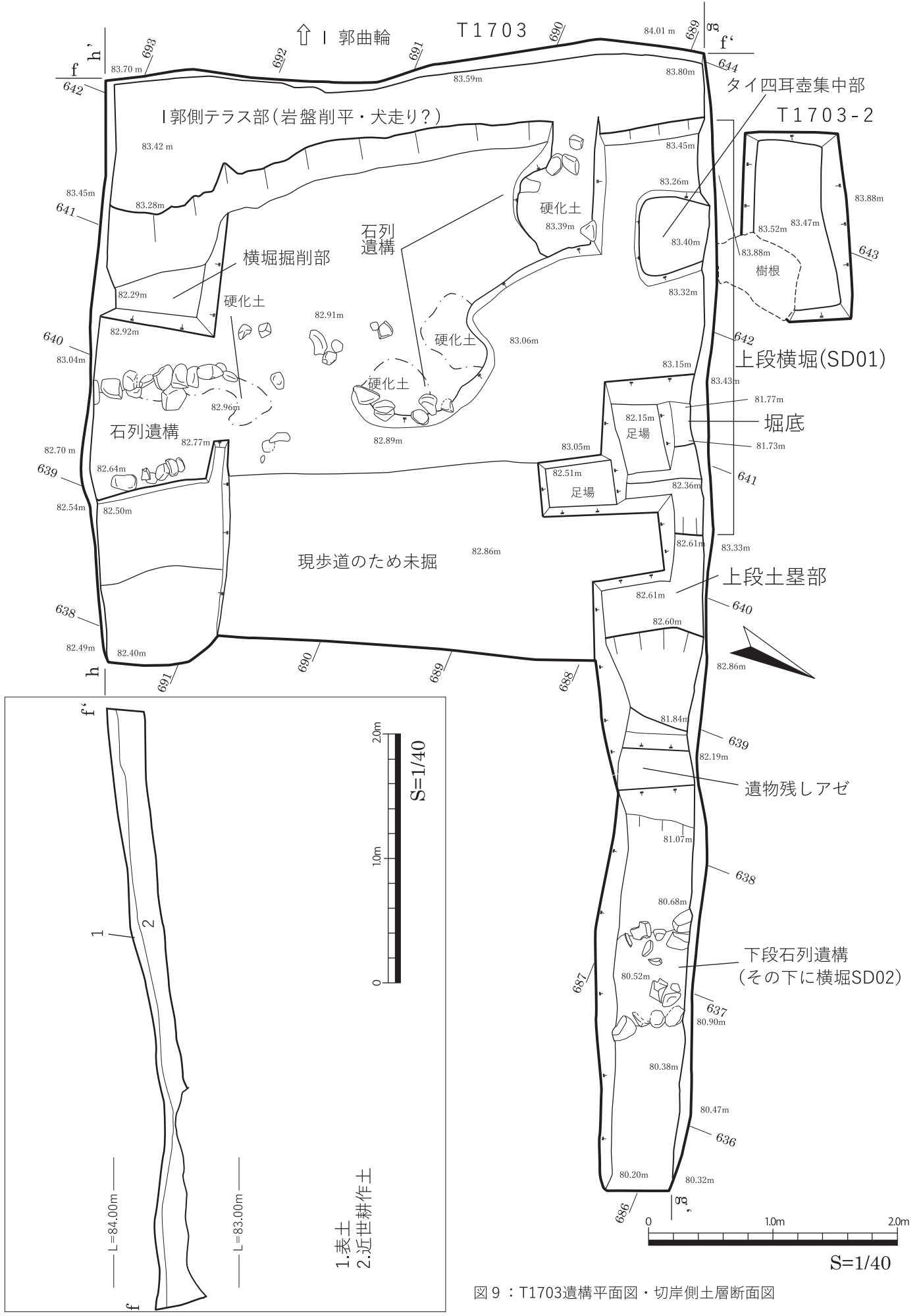
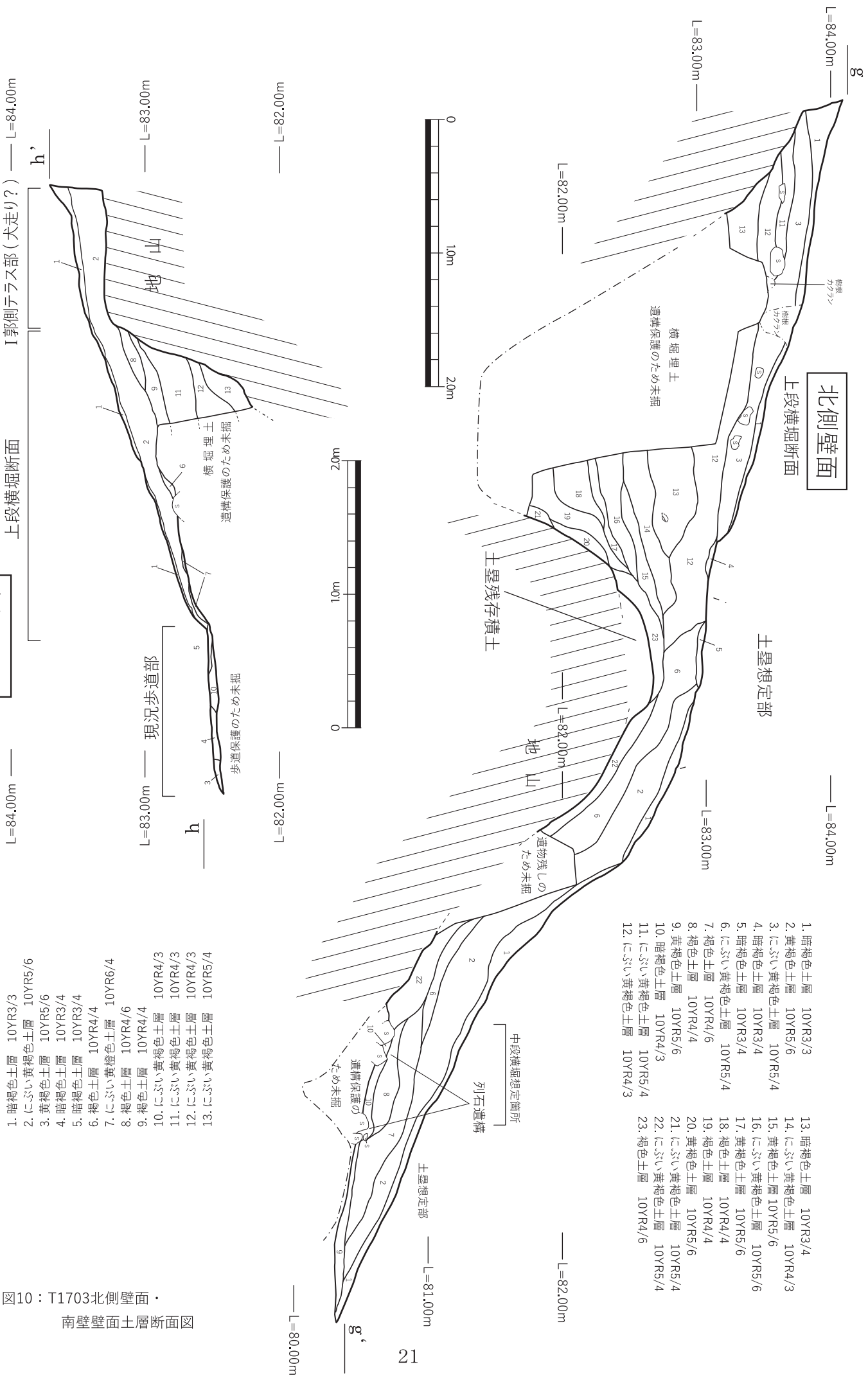


図9：T1703遺構平面図・切岸側土層断面図



- 1. 暗褐色土層 10YR3/3
- 2. 黄褐色土層 10YR5/6
- 3. にぶい黄褐色土層 10YR5/4
- 4. 暗褐色土層 10YR3/4
- 5. 暗褐色土層 10YR3/4
- 6. にぶい黄褐色土層 10YR5/4
- 7. 褐色土層 10YR4/6
- 8. 褐色土層 10YR4/4
- 9. 黄褐色土層 10YR5/6
- 10. 暗褐色土層 10YR4/3
- 11. にぶい黄褐色土層 10YR5/4
- 12. にぶい黄褐色土層 10YR4/3
- 13. 暗褐色土層 10YR3/4
- 14. にぶい黄褐色土層 10YR4/3
- 15. 黄褐色土層 10YR5/6
- 16. にぶい黄褐色土層 10YR5/6
- 17. 黄褐色土層 10YR5/6
- 18. 褐色土層 10YR4/4
- 19. 褐色土層 10YR4/4
- 20. 黄褐色土層 10YR5/6
- 21. にぶい黄褐色土層 10YR5/4
- 22. にぶい黄褐色土層 10YR5/4
- 23. 褐色土層 10YR4/6

- 1. 暗褐色土層 10YR3/3
- 2. にぶい黄褐色土層 10YR5/6
- 3. 黄褐色土層 10YR3/4
- 4. 暗褐色土層 10YR3/4
- 5. 暗褐色土層 10YR3/4
- 6. 褐色土層 10YR4/4
- 7. にぶい黄褐色土層 10YR6/4
- 8. 褐色土層 10YR4/6
- 9. 褐色土層 10YR4/6
- 10. 暗褐色土層 10YR4/3
- 11. にぶい黄褐色土層 10YR4/3
- 12. 暗褐色土層 10YR4/3
- 13. 暗褐色土層 10YR5/4
- 14. 暗褐色土層 10YR4/3
- 15. 暗褐色土層 10YR4/3
- 16. 暗褐色土層 10YR4/3
- 17. 暗褐色土層 10YR4/3
- 18. 暗褐色土層 10YR4/3
- 19. 暗褐色土層 10YR4/3
- 20. 暗褐色土層 10YR4/3
- 21. 暗褐色土層 10YR4/3
- 22. 暗褐色土層 10YR4/3
- 23. 暗褐色土層 10YR4/3

図10：T1703北側壁面・南側壁面土層断面図

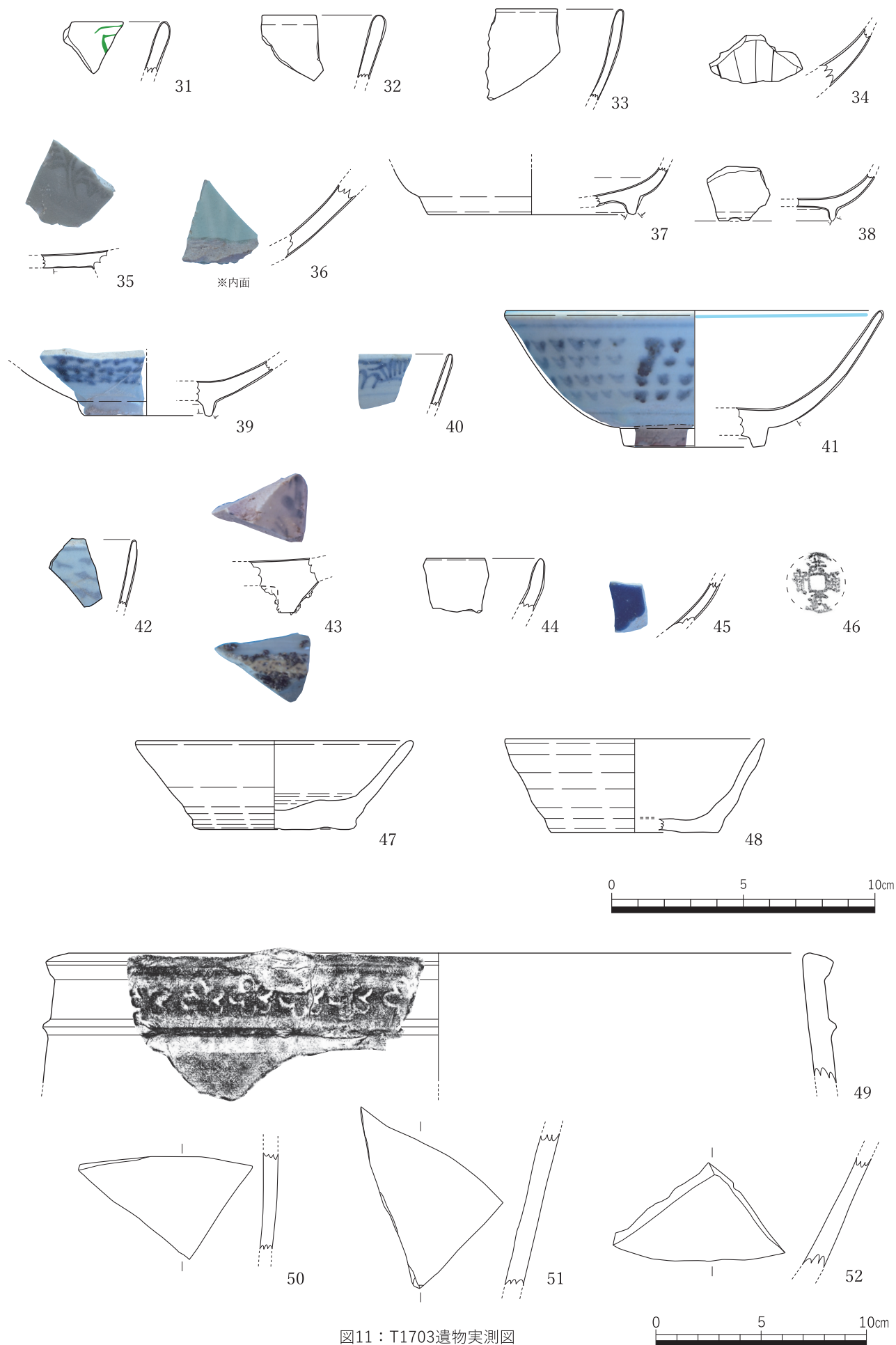


图11：T1703遺物実測図

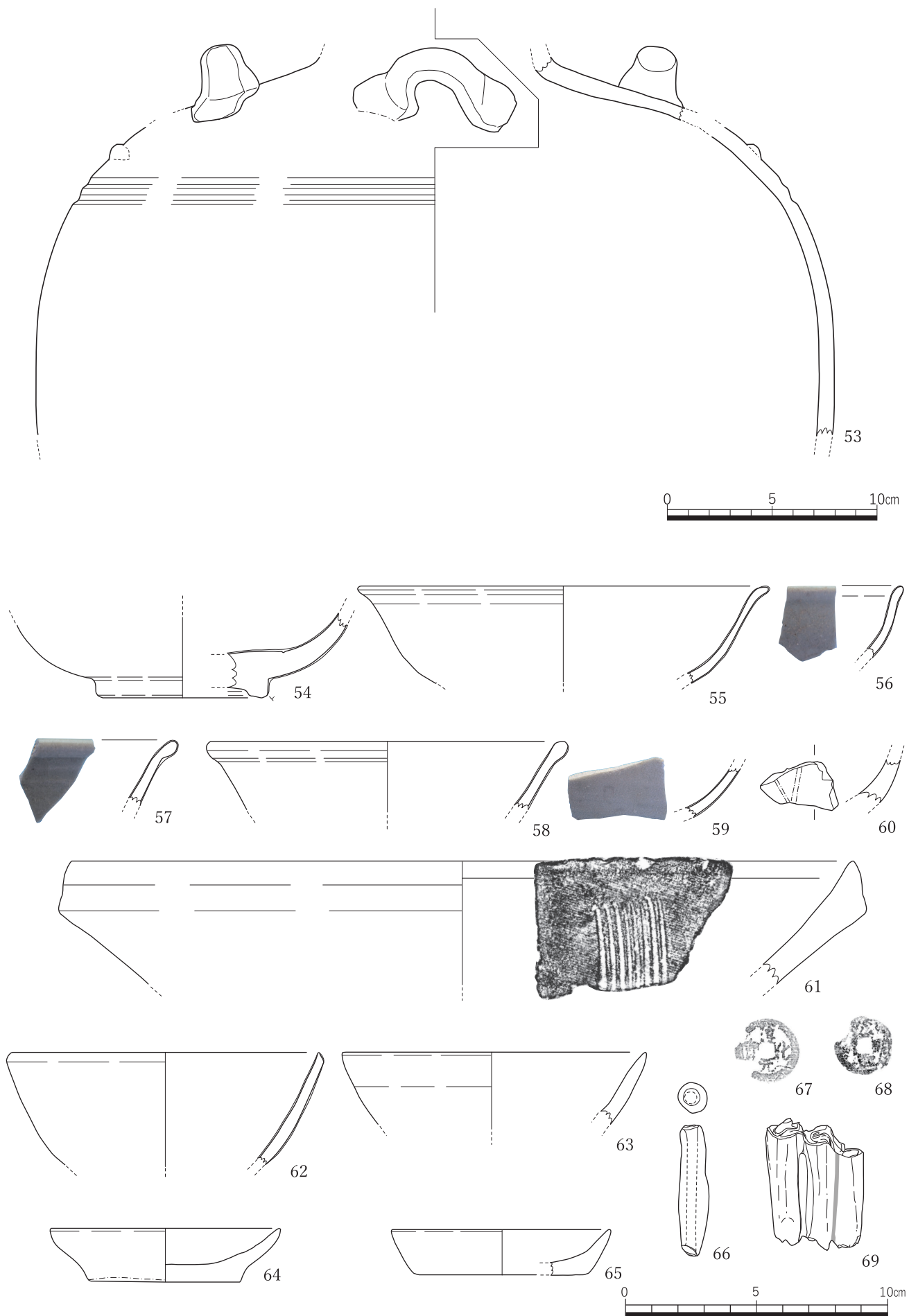


图12：T1703遺物実測図2

70 は龍泉窯系青磁碗。表面カセで判別しにくいですが、細線蓮弁文碗と考えられる。71・72 は白磁 D 類の皿。71 は内湾の口縁部。72 はえぐり高台部で、見込に4カ所の方形目痕。73・74 は青花 C 群碗。74 の人形文タイプは棚底城跡でもっとも多く見られる模様で、数多く搬入されたと思われる。75～77 は青花皿。いずれも B1 群か。78 は瓦質火舎。

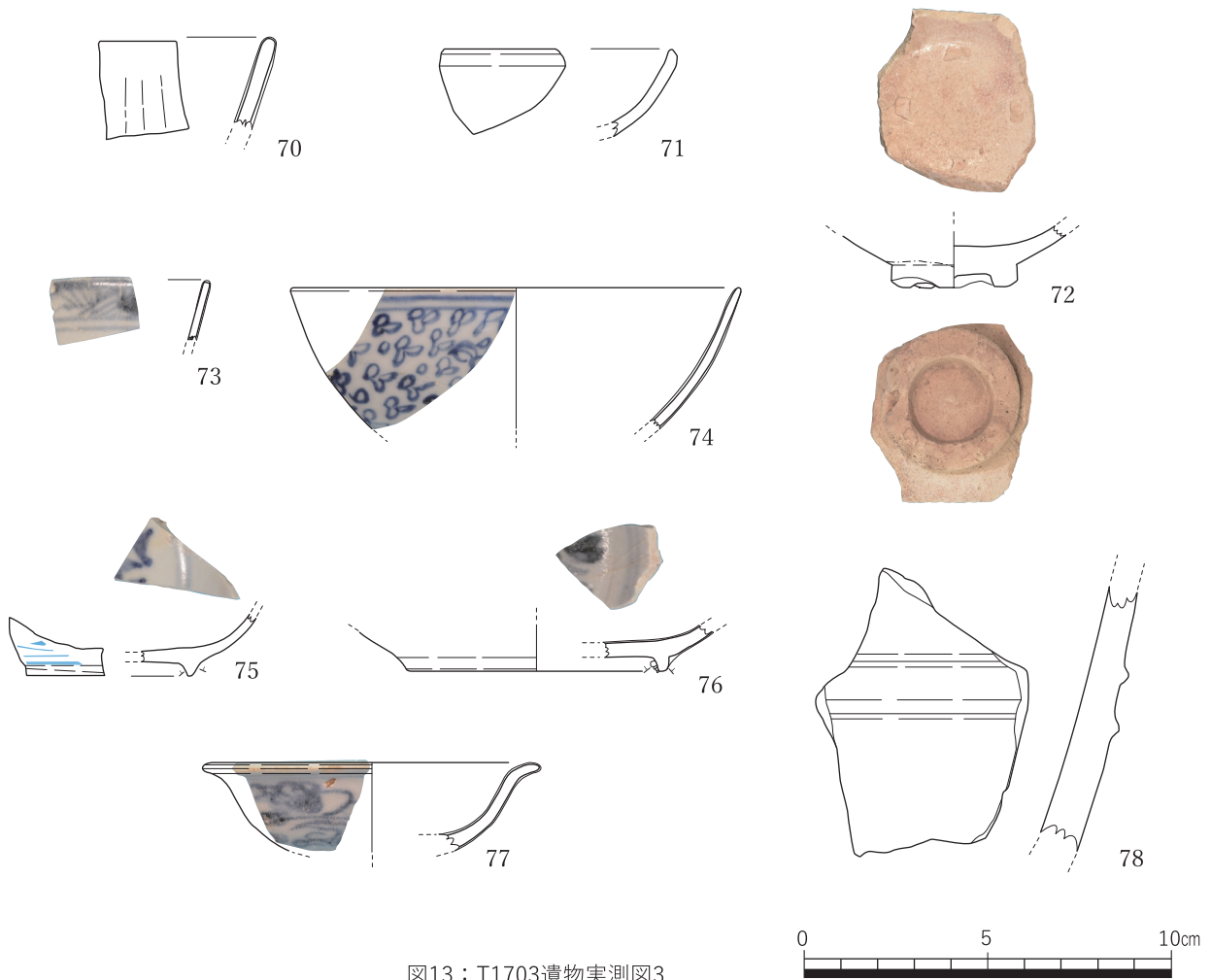


図13：T1703遺物実測図3

## 第2節 調査のまとめ

### 第1項 SD01の埋没年代について

今次調査で上段横堀 SD01 は、廃城後の埋没ではなく、城が機能している中で埋められ、帯曲輪の機能改変が図られたことが判明した。埋没年代は T1701 及び T1703 の出土遺物から、おおよそ 15 世紀前半までには埋まっていたことが確認できた。

T1701 では 9 層、T1703 では北壁 12 層が横堀の表面層になるが、その下部の横堀埋土層と表面層で明確に遺物が区分できた。表面付近からは、それぞれタイ黒褐釉陶器の破片が散布し、景德鎮系白磁 E 類皿や青花 C 群碗の破片が出土している。数は少ないが龍泉窯青磁では雷文帯碗 V 類や細蓮弁文碗 VI 類などが見られた。出土遺物の点数は、T1701・T1703 とも表面層が多い。また、下段の石列付近でも同様の遺物が多い。これらはおおむね 15 世紀中葉からの遺物で、主体となるのは 15 世紀後半～16 世紀前半の遺物群である。

SD01 の埋土層では、基本的に貿易陶磁は龍泉窯青磁の IV・IV'・V 類の、特に端反口縁の破片が単純に出土した。瀬戸哲也氏の編年では青磁 IV (新相)・IV'・V 類は 4 期に位置付けられ 1350～1420 年頃の年代が考えられている (瀬戸 2016)。同じ層中に「淳化元宝」や龍泉窯青磁 I 類碗も含むがこれらは前代の遺物が含まれたものといえる。また、天草では珍しい備前焼播鉢の口縁部破片は、その形状から乗岡実氏による編年 (乗岡 2000) の中世 3 期 b 頃に位置付けられるが、その年代はおおむね 14 世紀後半から 15 世紀前半であり年代に矛盾がない。

以上の出土遺物の状況から、棚底城跡 I 郭の北東側の帯曲輪に見られる上段横堀 SD01 と付属土塁は、土塁の取り崩しによって 15 世紀前半頃に埋められ、15 世紀後半以降は通路及び帯曲輪面として利用されたものと考えられる。ただし、その範囲は今回の調査ではあくまで、T0501-a から T1703 までの部分に限ったものであり、帯曲輪北部の土塁残存部や平成 30 年度調査区との整合は今後の検討課題である。

### 第2項 T1702検出の通路と石積遺構

T1702では、II 郭曲輪面から北側帯曲輪へと進入する通路とそれに付随して、城外側に設けられた石積遺構が確認された。II 郭から帯曲輪への進入には、木戸のような遮断装置の痕跡も想定されたが、そのような痕跡はなかった。一方で、検出された通路遺構は長さ約 3m で、その幅は 40～90 cm と極めて狭小であった。これは I 郭切岸の南東端裾部にあたる岩盤が予想以上に張り出していることから、狭小になったもので、あえて岩盤を削平せず残したものと推測される。このため通路部は、一度の多人数の通行を制限するため狭小にした可能性が高い。付随する石積遺構は、不徹底な石材の配置手法から、堅固な補強とは言い難いが、

通路部の崩落防止等を企図した造作と考えられる。上津浦城跡でも類似の石積遺構が見られることから、上津浦氏に特徴的な城づくり技術であるのか、あるいは天草衆全体に敷衍できる技術であるか、今後の資料の蓄積が必要である。また、北側への敷設範囲や基底部の様相確認も課題といえよう。今後、今次調査成果を反映した史跡整備の進捗が期待される。

#### 参考文献

- ・倉岳町教育委員会 2005『棚底城跡』
- ・瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間満・松原哲志 2007『紀要 沖縄埋文研究 5』沖縄県立埋蔵文化財センター編
- ・瀬戸哲也 2016「沖縄出土貿易陶磁器の時期と様相」『陶磁器研究の視点—生産・流通・消費—』日本貿易陶磁研究会編
- ・乗岡実 2000「備前」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会編



表1：出土遺物一覧（第5次発掘調査）

検出番号	器種名	出土地	出土層位	最大長(口径)	最大幅(底径)	高さ	外面色調	内面色調	調整
1	肥前系陶器銅線釉皿	T1701 上段	1層	5.7cm		2.7cm	ベージュ	山鳩色	
2	龍泉窯系青磁碗	T1701 上段	1層	4.8cm	(2.8cm)	2.8cm	柳茶	柳茶	高台内回転ナデ
3	龍泉窯系青磁皿	T1701 上段	1層	3.6cm	2.8cm	1.8cm	草色	草色	
4	景德鎮窯系白磁皿	T1701 上段	4層	5.8cm	(復元7.0cm)	2.8cm	白色	白色	
5	景德鎮窯系白磁皿	T1701 上段	9層	3.2cm	(復元8.6cm)	1.6cm	白色	白色	
6	タイ黒褐釉陶器	T1701 上段	9層	9.3cm	8.7cm		黒～洪紙色	茶鼠色	内面回転ナデ
7	瓦質土器 風炉or火舎	T1701 上段	9層	4.8cm		2.6cm	褐色	褐色	
8	瓦質播鉢	T1701 上段	9層	8.2cm	7.5cm	7.0cm	灰色	灰色	
9	瓦質播鉢	T1701 上段	9層	12.3cm	9.4cm	8.2cm	薄香	薄香	外面ナデ・指頭圧痕
10	瓦質火舎	T1701 上段	4層	17.2cm	(復元24.6cm)	9.8cm	肌色	肌色	内外面回転ナデ
11	龍泉窯系青磁碗口縁	T1701 堀埋土	11層	3.2cm	3.2cm	2.8cm	柳茶	柳茶	
12	龍泉窯系青磁小片	T1701 堀埋土	10層	3.1cm	2.6cm	1.3cm	山鳩色	山鳩色	
13	土師器坏	T1701 堀埋土	12or14層	(14.2cm)	(8.6cm)	3.3cm	肌色	肌色	底部系切・内外面ナデ
14	土師器皿	T1701 堀埋土	14層	(復元9.8cm)	(復元7.0cm)	2.0cm	杏色	杏色	内外ナデ
15	土師器皿	T1701 堀埋土	14層	(復元10.0cm)	(復元7.2cm)	2.2cm	肌色	肌色	内面回転ナデ
16	青花碗口縁	T1701 下段	6層	3.6cm	3.4cm	1.6cm	青みがかった白	青みがかった白	
17	土師器皿	T1701 下段	6層	3.8cm	(復元6.4cm)	2.3cm	肌色	肌色	
18	筒形無釉陶器	T1701 下段	2or6層	(復元10.2cm)	4.7cm	3.8cm	丁子茶	丁子茶	内外面回転ナデ
19	龍泉窯系青磁皿口縁	T1702	6層	2.3cm	2.3cm	1.6cm	苗色	苗色	
20	龍泉窯系青磁皿香炉	T1702	5層	3.2cm	2.7cm	3.0cm	生壁色	生壁色	内外面回転ナデ
21	景德鎮窯系青花端反碗	T1702	5or6層	4.6cm	2.2cm	3.8cm	青みがかった白	青みがかった白	
22	漳州窯系青花碗	T1702	6層	3.6cm		3.2cm	スノーホワイト	スノーホワイト	
23	漳州窯系青花皿	T1702	5or6層	4.2cm	(復元6.2cm)	1.8cm	白色	白色	高台内回転ナデ・ケズリ
24	肥前系染付磁器皿	T1702	5or6層	5.2cm	(復元5.2cm)	1.4cm	青みがかった白	青みがかった白	見込釉あれ
25	中国褐釉陶器破片	T1702	6層	3.8cm	3.4cm	3.6cm	焦茶	焦茶	
26	土鉢	T1702	5層	3.5cm	1.1cm		赤香	赤香	
27	土師器皿	T1702	6層	(復元7.0cm)	(復元5.0cm)	2.0cm	薄香	薄香	内外面回転ナデ
28	瓦質播鉢	T1702	6層	13.2cm	7.8cm	7.2cm	肌色	肌色	外面ナデ・指頭圧痕・内面使用痕
29	須恵質甕	T1702	6層	8.6cm	7.5cm	7.1cm	鼠色	鼠色	内面ナデ
30	須恵質甕	T1702	6層	8.2cm	6.6cm	6.0cm	茶鼠色	茶鼠色	
31	龍泉窯系青磁雷文帯碗片	T1703 上段	南壁2層	2.3cm	2.0cm	1.9cm	苗色	苗色	
32	龍泉窯系青磁碗片	T1703 上段	北壁12層	2.6cm	2.1cm	2.4cm	生壁色	生壁色	
33	龍泉窯系青磁碗片	T1703 上段	南壁2層	3.5cm	2.8cm	3.4cm	アイボリー	砂色	
34	龍泉窯系青磁細線蓮弁文碗片	T1703 上段	北壁3層	3.4cm	2.4cm	1.8cm	生壁色	生壁色	
35	龍泉窯系青磁皿？片	T1703 上段	南壁6層	3.4cm	3.3cm	0.7cm	山鳩色	山鳩色	
36	龍泉窯系青磁盤or皿片	T1703 上段	北壁1層	3.8cm	2.9cm	2.7cm	山鳩色	山鳩色	
37	白磁皿	T1703 上段	北壁3層	5.5cm	(復元7.8cm)	1.8cm	乳白色	乳白色	
38	景德鎮窯系白磁皿	T1703 上段	北壁1層	3.5cm	2.0cm	1.6cm	白色	白色	
39	青花碗	T1703 上段	南壁7層	3.9cm	(復元5.0cm)	2.2cm	青みがかった白	青みがかった白	
40	景德鎮窯系青花碗片	T1703 上段	南壁4層	2.1cm	2.2cm	2.0cm	青みがかった白	青みがかった白	
41	漳州窯系青花碗	T1703 上段	北壁2層	(復元14.8cm)	(復元5.2cm)	5.2cm	青みがかった白	青みがかった白	
42	漳州窯系青花碗片	T1703 上段	北壁3層	2.6cm	2.1cm	2.2cm	青みがかった白	青みがかった白	
43	漳州窯系青花大皿片	T1703 上段	南壁2層	3.6cm	2.6cm	2.0cm	薄鈍色	薄鈍色	砂y多数付着
44	中国産天目茶碗片	T1703 上段	北壁12層	2.5cm	2.0cm	1.9cm	黒	黒	
45	景德鎮窯系瑠璃釉碗片	T1703 上段	南壁3層	2.6cm	1.2cm	1.2cm	ネービーブルー	青みがかった白	
46	銭貨「洪武通宝」	T1703 上段	北壁3層？	2.4cm	1.8cm		灰緑色	灰緑色	
47	土師器坏	T1703 上段	北壁12層	(復元10.3cm)	(6.2cm)	3.5cm	レグホーン	レグホーン	底部系切・内外面ナデ
48	土師器坏	T1703 上段	北壁12層	(復元9.8cm)	(復元6.3cm)	3.8cm	薄卵色	薄卵色	底部系切・内外面ナデ
49	瓦質火舎	T1703 上段	北壁3層？	(復元37.8cm)	13.4cm	6.4cm	パールグレー	パールグレー	口縁・内面回転ナデ
50	タイ黒褐釉陶器	T1703 上段	北壁12層	8.2cm	5.0cm	4.4cm	黒	茶鼠色	内面回転ナデ
51	タイ黒褐釉陶器	T1703 上段	北壁12層	9.0cm	5.9cm	7.1cm	黒	茶鼠色	内面回転ナデ
52	タイ黒褐釉陶器	T1703 上段	北壁3層？	8.1cm	5.8cm	5.2cm	梅鼠色	梅鼠色	内面回転ナデ
53	タイ黒褐釉陶器	T1701・T1703	北壁12層他	(復元胴径38.8cm)		18.2cm(残存復元)	黒	茶鼠色	
54	龍泉窯系青磁碗	T1703 堀埋土	北壁13層	6.1cm	(復元6.4cm)	2.8cm	生壁色	生壁色	
55	龍泉窯系青磁碗	T1703 堀埋土	北壁14層	(復元15.8cm)	7.4cm	3.9cm	生壁色	生壁色	
56	龍泉窯系青磁碗	T1703 堀埋土	北壁16層	3.0cm	2.1cm	2.8cm	山鳩色	山鳩色	
57	龍泉窯系青磁碗	T1703 堀埋土	北壁12～13層	3.5cm	2.8cm	2.8cm	山鳩色	山鳩色	
58	龍泉窯系青磁碗	T1703 堀埋土	南壁11層	(復元13.8cm)	8.1cm	2.8cm	生壁色	生壁色	
59	龍泉窯系青磁碗	T1703 堀埋土	北壁14層	3.8cm	3.0cm	1.8cm	生壁色	生壁色	
60	龍泉窯系青磁皿？	T1703 堀埋土	南壁9or11層	2.8cm	2.4cm	0.7cm	生壁色	生壁色	
61	備前焼播鉢	T1703 堀埋土	北壁14層	(復元31.2cm)	8.2cm	4.7cm	焦茶	焦茶	
62	中国天目茶碗	T1703 堀埋土	北壁12or14層	(復元12.3cm)	4.8cm	4.2cm	黒	黒	
63	土師器坏	T1703 堀埋土	北壁15～17層	(復元11.6cm)	5.4cm	2.6cm	肌色	肌色	
64	土師器皿	T1703 堀埋土	北壁13層	(復元8.7cm)	(6.0cm)	2.2cm	赤香	赤香	
65	土師器皿	T1703 堀埋土	北壁15～17層	(復元8.2cm)	(復元6.2cm)	1.8cm	肌色	肌色	
66	土鉢	T1703 堀埋土	北壁15～17層	5.0cm	1.1cm		赤香	赤香	
67	銭貨「淳化元宝」	T1703 堀埋土	北壁15～17層	2.5cm	2.5cm		灰緑色	灰緑色	
68	銭貨	T1703 堀埋土	北壁15～17層	2.2cm	2.2cm		灰緑色	灰緑色	
69	ウン歯	T1703 堀埋土	北壁14層	3.7cm		5.0cm	アイボリー	アイボリー	
70	龍泉窯系青磁細線蓮弁文碗片	T1703 下段	北壁2層	2.7cm	2.5cm	2.5cm	山鳩色	山鳩色	
71	白磁内湾皿片	T1703 下段	北壁2層	3.4cm	3.0cm	2.6cm	ベージュ	ベージュ	
72	白磁挟り高台皿	T1703 下段	北壁6層	5.6cm	(3.3cm)	1.6cm	生成色	生成色	
73	景德鎮窯系青花碗片	T1703 下段	北壁2層	2.4cm		1.5cm	青みがかった白	青みがかった白	
74	景德鎮窯系青花碗片	T1703 下段	北壁10層	(復元12.3cm)	5.6cm	3.8cm	青みがかった白	青みがかった白	
75	景德鎮窯系青花皿片	T1703 下段	北壁10層	3.5cm	2.5cm	1.7cm	青みがかった白	青みがかった白	
76	景德鎮窯系青花皿片	T1703 下段	北壁2層	3.0cm	(復元6.8cm)	1.0cm	青みがかった白	青みがかった白	
77	景德鎮窯系青花皿片	T1703 下段	北壁10層	(復元9.1cm)	3.5cm	2.2cm	青みがかった白	青みがかった白	
78	瓦質火舎	T1703 下段	北壁10層	7.8cm	5.7cm	7.1cm	駱駝色	駱駝色	

※色調は、尚学図書編1986『色の手帖』小学館 を参照した。青花釉は適切な該当色が無かったため、独自の表現とした。



## 第4章 第6次発掘調査成果

### 第1節 第6次調査区トレンチ概要と出土遺構・遺物

平成30年度実施の第6次発掘調査は横堀の終結点の確定(T1805)、虎口の確認(T1902)、虎口想定地に至る城道の確認、I郭直下の華南三彩が表採された平場の性格の把握(T1804)を目的に実施した。4箇所の特レンチを設定し、その内の3箇所を調査した(図14)。調査トレンチを減らした理由は、虎口が確認されなかったためにそこに至る城道の確認をする必要がなくなったからである。また、T1805の調査は、第5次発掘調査において横堀の埋没過程や犬走りがあるという所見に対して、史跡棚底城跡整備検討委員会から疑義がもたれ、文化庁及び熊本県文化課の指導を適宜受けながらT1805拡張トレンチでそれらについて確認した。詳細は後述する。

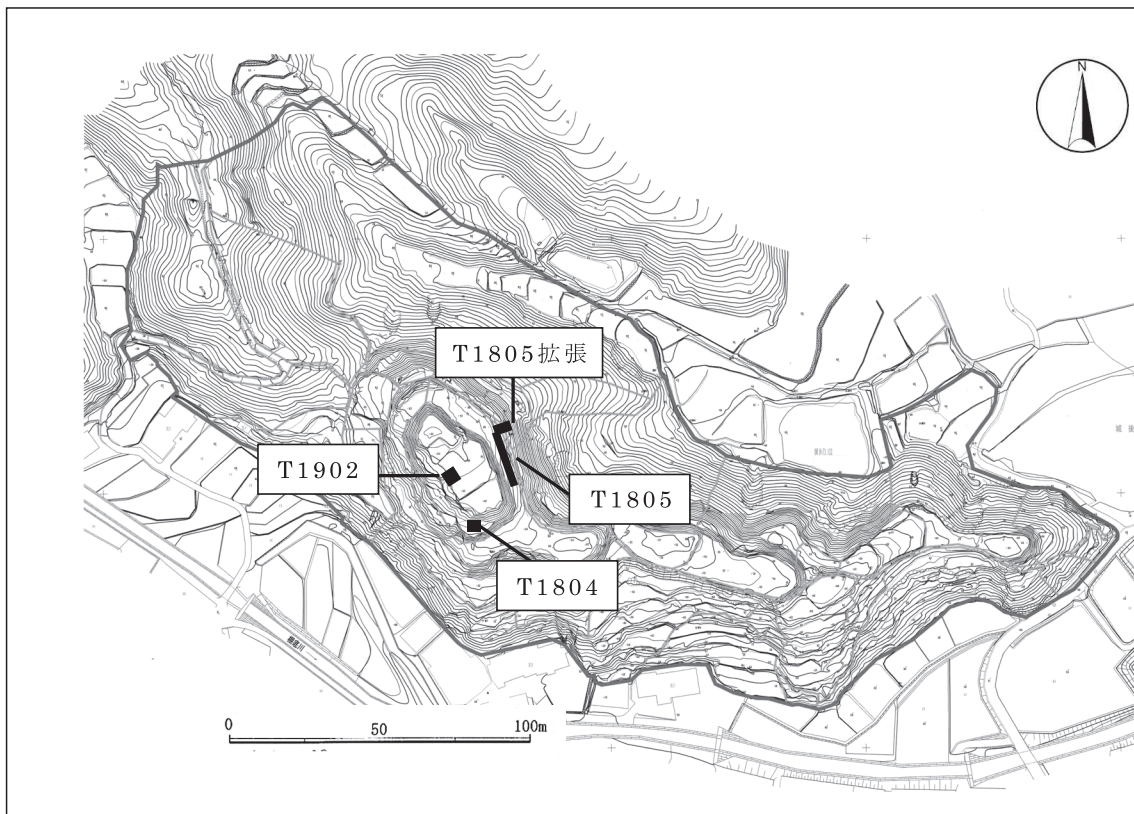


図14：第6次発掘調査トレンチ配置

### 第2節 T1805・T1805拡張(図15~19/写真図版p.13~15・p17)

10.0m×3.0mでT1805を設定し、史跡棚底城跡整備検討委員会・文化庁・熊本県文化課の了解のもと、切岸と横堀との関係を把握するために1.5m×4.0mで一部拡張トレンチを設定した。

拡張トレンチで横堀と土塁を検出した。横堀は幅約 2.0mの薬研堀である。I 郭側の側面の岩盤には削った痕跡が見られることから人為的に岩盤を掘り込んで形成されたと考えられる。東側は土塁を利用して立ち上げている。北側土層（図 16）及び拡張南側土層（図 17）を見ると、横堀の埋没は I 郭側切岸からの流れ込みで発生したことは明らかである。崩落した土を取り除いたり、土塁を崩して埋めた痕跡は認められない点から城としての機能を失った後に自然崩落したものと考えたい。したがって、本トレンチ内から出土する遺物は元々 I 郭にあったものが切岸の崩落に伴って流れ込んだものと位置づけることが好ましい。

次に拡張南側土層に注目したい。最下層に暗茶色土層があり、これは北側土層にはない。また、北側土層の第 6 層は標高約 80.0m 以下に堆積が見られる一方で、南側は約 79.0m 以下からと、1m ほどの差が見られる。つまり、狭小な本トレンチの北側から南側にかけて横堀は急激に下がっており、かつ南側は閉ざされていないということが分かる。平面で見ると、横堀が北側から南側にかけて広がるのが分かる。このことから本トレンチの北側は堀という閉ざされた空間であるのに対し、南側は堀ではなく開口していると想定できる。川から海に向けて広がる河口のようなイメージである。したがって、T1805 拡張で検出した横堀は末端であると結論付けた。I 郭側から崩落してきた土砂は当然ながらレベルの低い方向へ堆積していくため、北側と南側の土層で若干の相違が見られる。

土塁は地山を削り出して形成されていることが判明した。これまでの発掘調査では土塁について版築状態とされてきたが、本調査では版築は確認されなかった。土塁も横堀と同様に急激に下がっている点や横堀が広がることに反比例して細くなっている点から末端に近い部分と考えられる。なお、土塁は細くなった後に東側に曲がっている。つまり、土塁は横堀を塞ぐように終息するのではなく、I 郭側からの切岸と合流するような形状をとっている。いずれにせよ、土塁を崩して横堀を人為的に埋没させたということは認められない。

第 5 次発掘調査時に「犬走り」とされた箇所についても検証を行った。T1805 でも平坦な岩盤は検出され、一見すると遺構に見える。しかし、横堀及び土塁と同時期に使用されていた遺構とするならば、土の堆積も同時期に起こるはずである。図 16 をみると、平坦な岩盤上に堆積しているのは、表土と耕作土と想定される第 2 層、I 郭側から崩落してきた明黄色礫層であり、これらは横堀の内部に堆積していない。つまり、横堀が埋没する初期段階には平坦な岩盤は地表に出ていなかったということである。また、平坦な岩盤上に加工痕は一切確認されない。したがって、「犬走り」は遺構ではない。

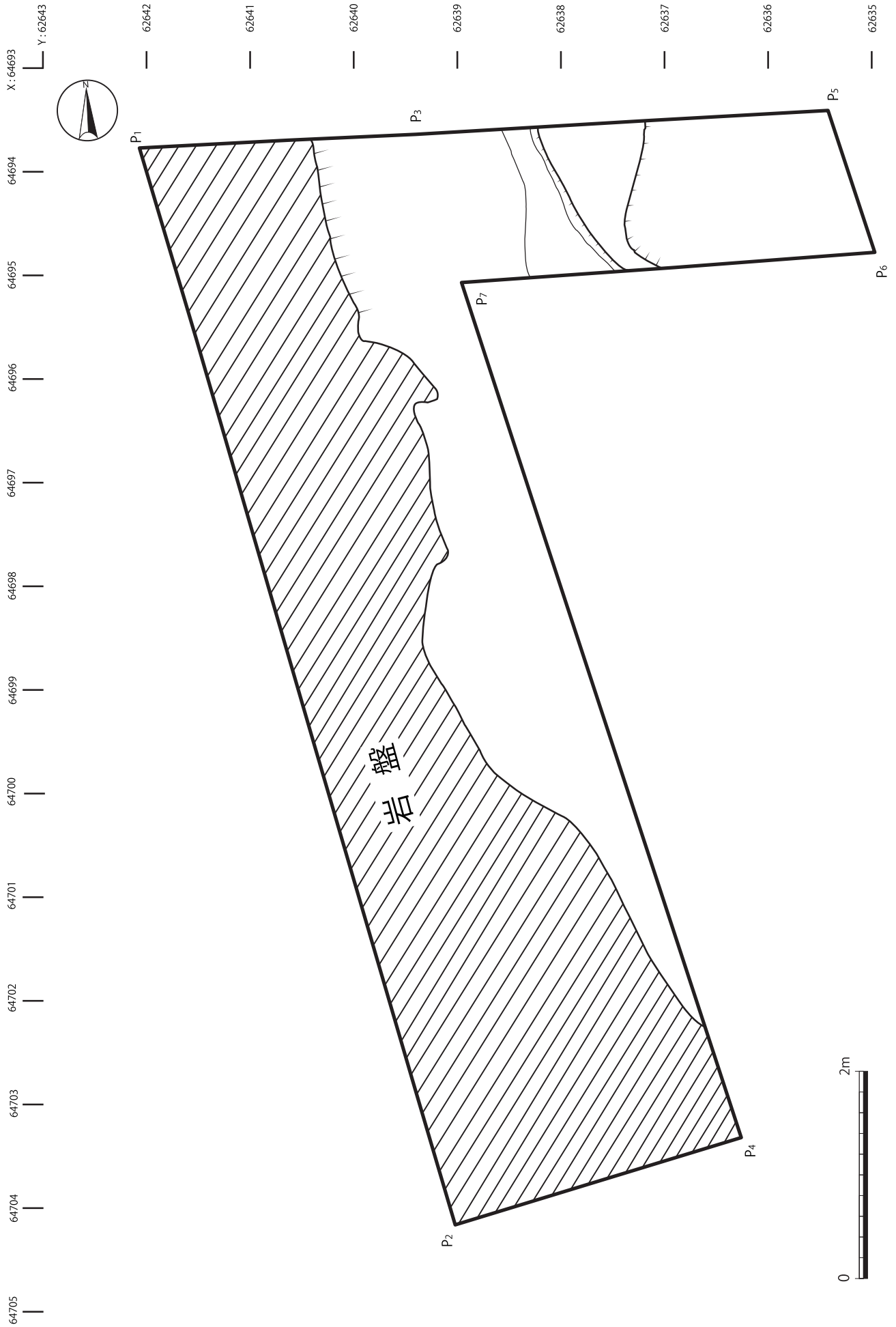
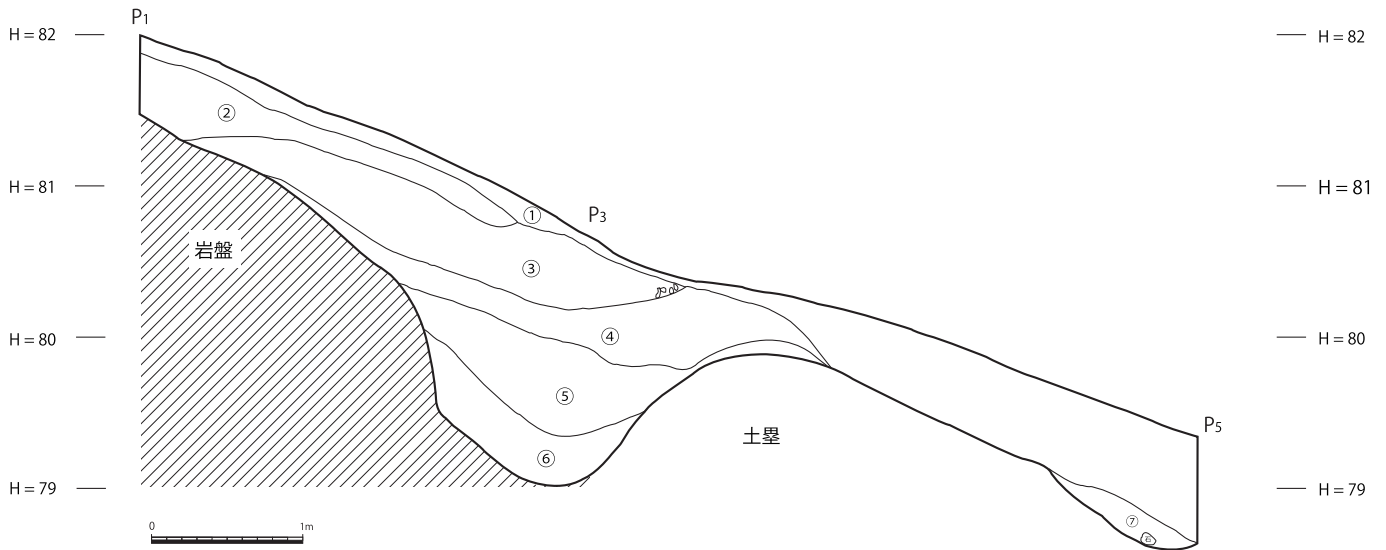
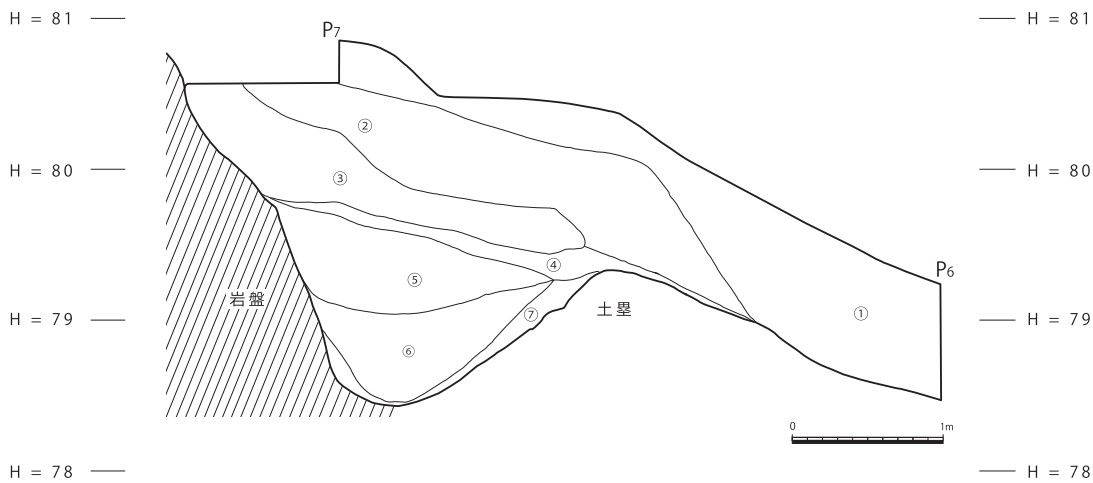


图15：T1805平面



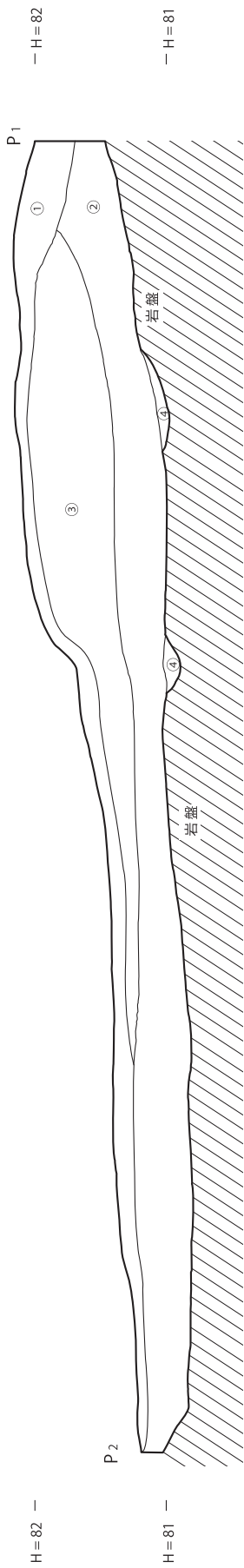
- ①表土
- ②暗茶色土層……耕作土か。黄色礫を僅かに含む。
- ③明黄色礫層……径1～5cmの礫と拳大の黄色礫が混じる。乾いた土。
- ④暗黄色土層……径1～5cmの黄色礫が少量混じる。炭化物豊富。湿った土。
- ⑤明茶色土層……径1cm～拳大の黄色礫が散見される。乾いた土。
- ⑥黄土色土層……径5cm程度の黄色礫が混じる。湿った土。
- ⑦黒色シルト層……径1cm程度の黄色礫が混じる。10cm程度の黄色い岩石が1つ入る。

図16：T1805北側土層



- ①表土
- ②茶褐色土層……径2～5cm程度の黄色礫が混じる。
- ③明黄色礫層……拳大の黄色礫が大量に混じる。乾いた土。
- ④暗黄色土層……径1cmの黄色礫が少量混じる。炭化物豊富。湿った土。
- ⑤明茶色土層……径1cm～拳大の黄色礫が散見される。乾いた土。
- ⑥黄土色土層……径5cm程度の黄色礫が混じる。湿った土。
- ⑦暗茶色土層……サラサラしていて不純物が少ない。

図17：T1805拡張南側土層



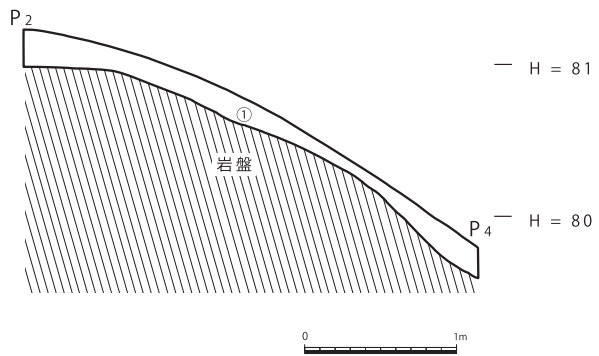
①表土

- ②黄褐色土層…拳大の岩が混じる。切岸崩落土。
- ③暗褐色土層…径1mm程度の黄色砂粒が混じる。
- ④明黒土層…径2mm程度の砂粒が混じる。

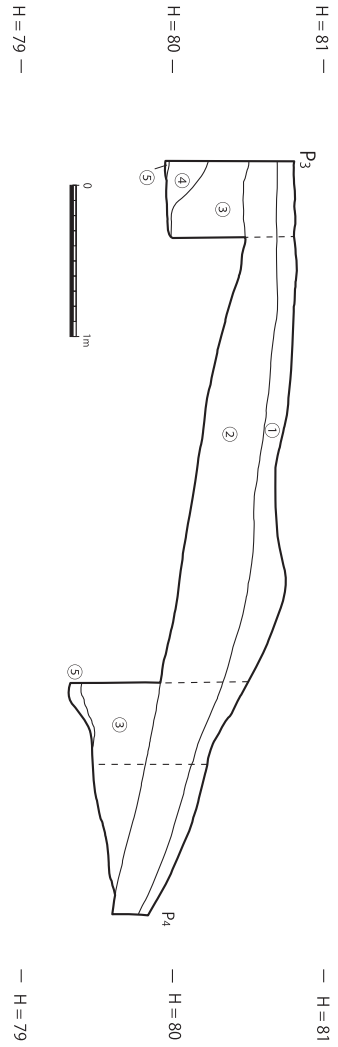
H = 82

H = 81

H = 80



①表土



①表土

- ②暗茶色土層…耕作土か。黄色礫を僅かに含む。
- ③茶褐色土層…径2～5cmの黄色礫が混じる。
- ④明黄色礫層…拳大の黄色礫を含む。乾いた土。
- ⑤暗黄色土層…炭化物を含む。径1cm程度の黄色礫を含む。湿った土。

H = 79

H = 80

H = 81

図18：T1805西・南・東側土層

出土遺物は殆どが小破片で実測に耐えうるものはあまりなかった。図 19 に提示している遺物の内、79～81 は暗茶色土層、82 は暗黄色土層一括、83 は暗黄色土層から出土したものである。79 は景德鎮窯系の白磁の口縁部で、残存高は 1.9 cm、胎土は緻密で焼成は良好である。80 は青花碗で残存高 3.4 cm、復元口径 11.4 cm である。胎土は緻密で焼成は良好。81 は青花碗で残存高は 1.7 cm で胎土は緻密で焼成は良好。82 は青花碗で全体的に黄色味かかっている。残存高 1.4 cm、復元口径 9.0 cm で、胎土は緻密で焼成は良好である。83 は白磁碗で高さ 3.1 cm、復元口径 12.0 cm である。胎土は粗目で焼成は良好。全体に釉をかけてあるが、釉剥ぎは見られない。

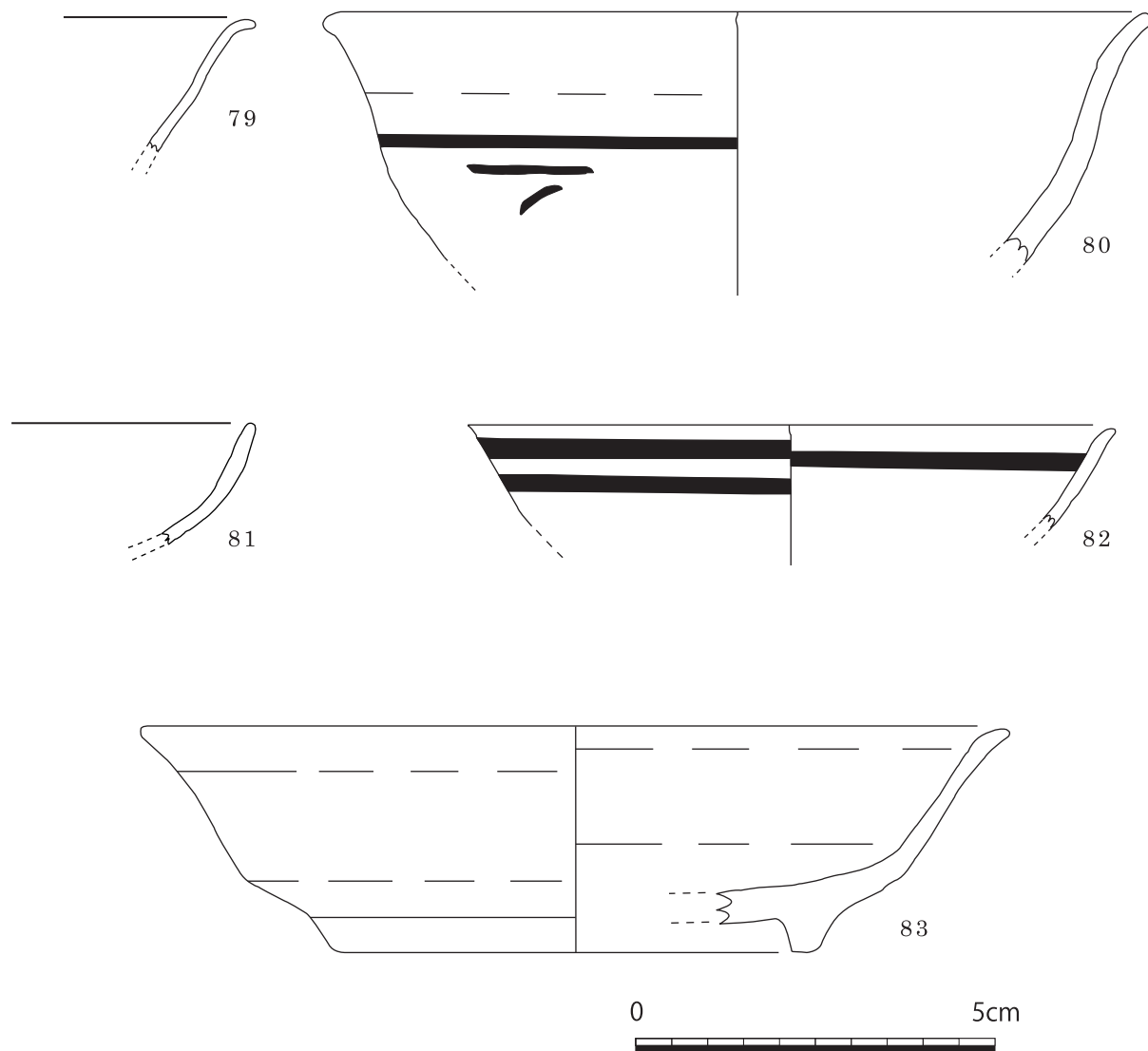


図 19 : T1805 出土遺物

### 第3節 T1804( 図20～21/ 写真図版 p.16)

I 郭直下の華南三彩が表採された平場の性格の把握のために 3.0m×3.0mで設定した。T1902を虎口と想定した場合に本トレンチを設定した場所は、虎口を通過する様子を把握できる位置にあることから建物跡が検出されることを想定したものである。

表土と黄褐色土層からなっており、遺構は検出されなかった。トレンチ西部に見られる僅かな窪みは、水が流れて削られたものと思われ、かなり粘質な土であった。黄褐色土層はT1805でも見られた層と同一のものである。出土遺物は土層の状況からみてもI郭からの流れ込みと判断される。

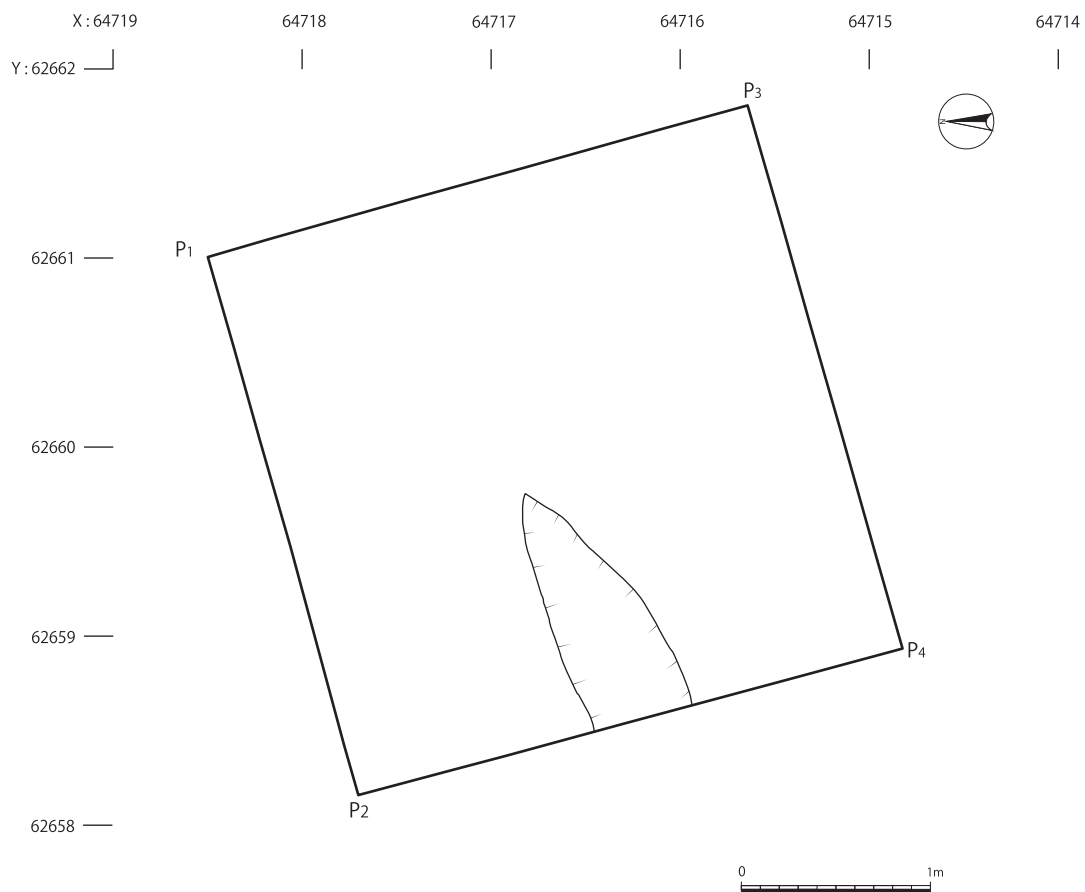
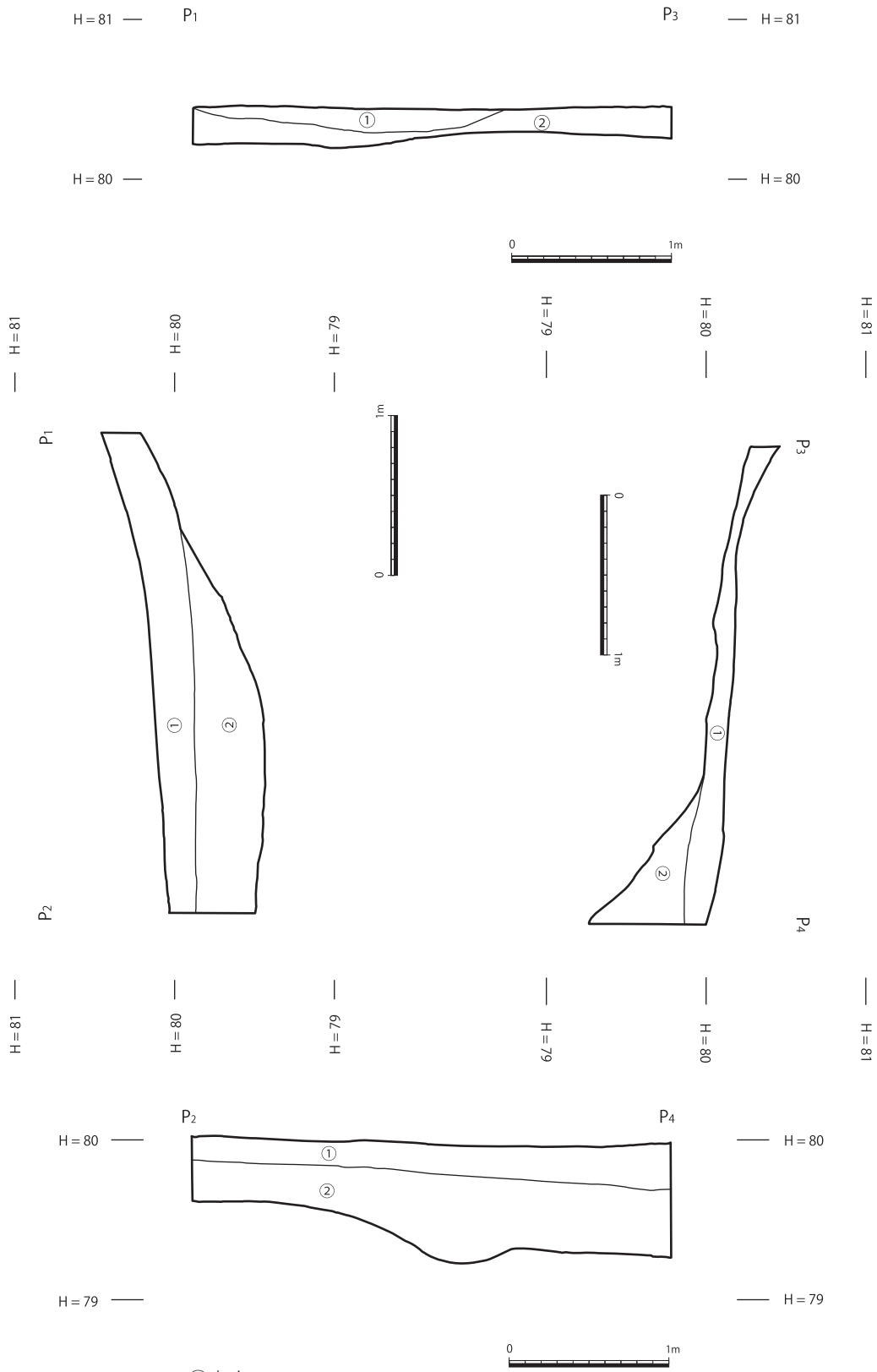


図 20 : T1804 平面





- ①表土
- ②黄褐色土層…径 1 cm 程度の砂粒を含む。T1805 と同一。

図 21 : T1804 土層

#### 第4節 T1902 (図22~23/写真図版p.16)

虎口の確認目的で2.5m×2.5mで設定した。掘り下げてすぐに土嚢が次々と地中から出てきて、全ての土嚢を取りだした時点で既に岩盤であった。したがって、本トレンチで虎口は確認されなかった。また、石積も土嚢が石の下からも出てきたことから中世のものではないと判断した。

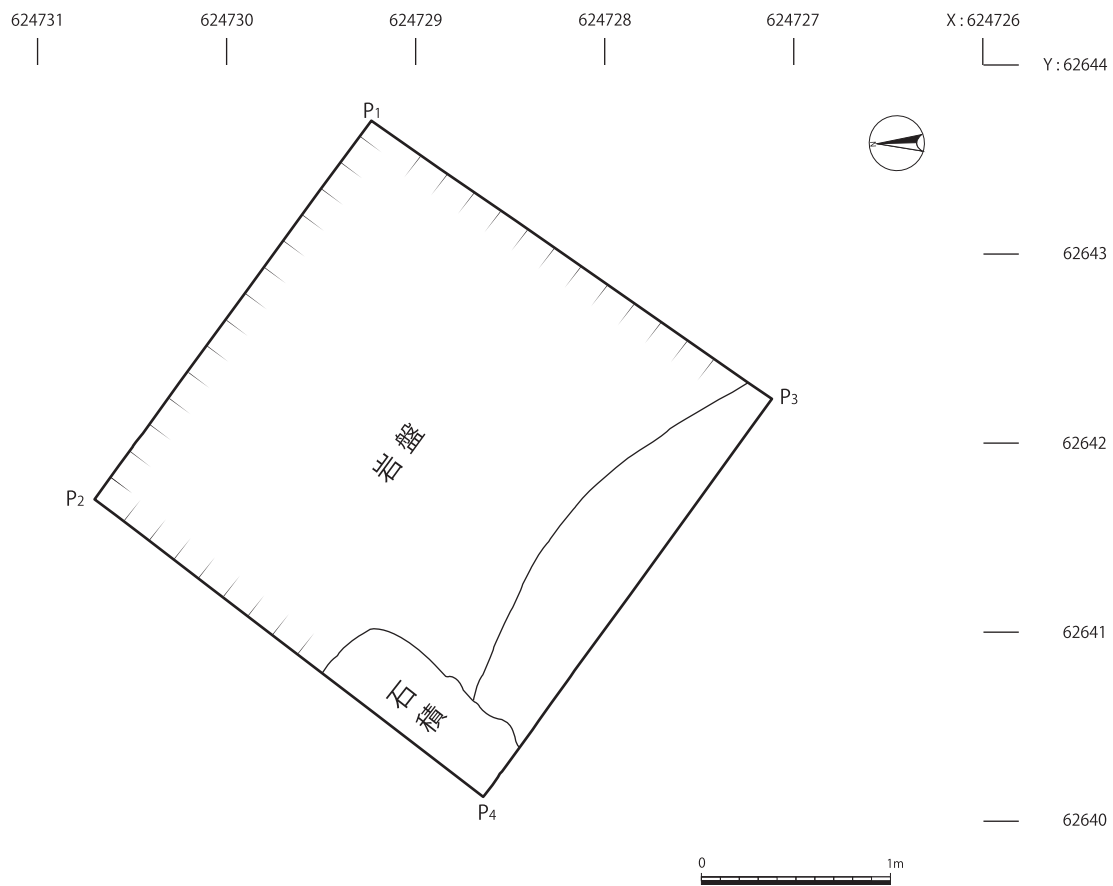
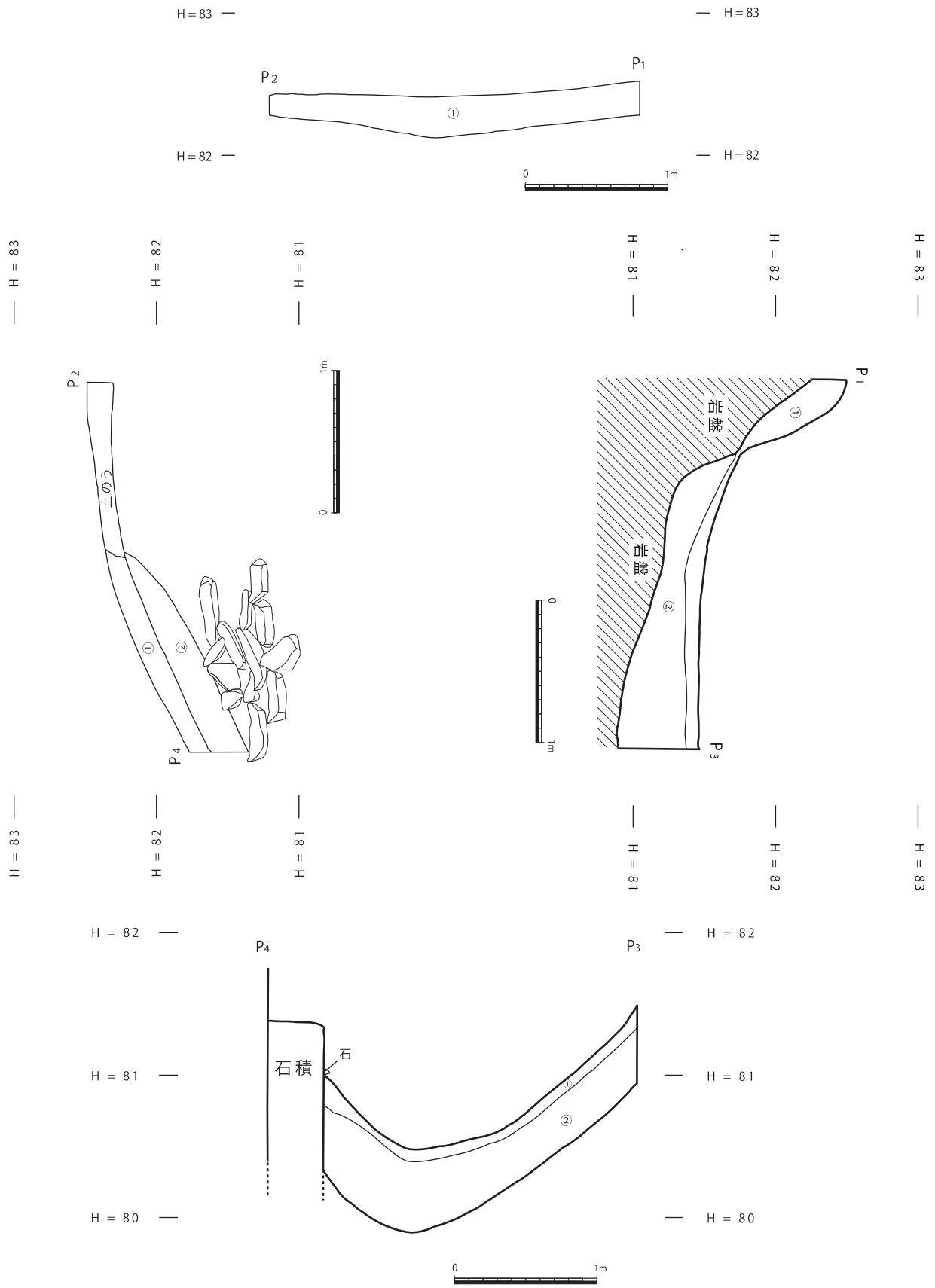


図22：T1902 平面



- ①表土
- ②黄白色土層…非常に固く、岩盤を掘削したものと思われる。

図 23 : T1902 土層

表2：出土遺物一覧（第6次発掘調査）

発掘区	取り上げ番号	日付	内容	点数	器種	実測図番号	写真番号	備考
T 1 8 0 5	表土一括	10/3	土師器2点、白磁4点、 青花4点、陶器2点、鉄滓1点	13	不明	—	—	—
	暗茶色土層	10/10	土師器3点、青磁4点、 白磁3点、青花6点、 木炭4点、近世陶器6点	26	青磁碗2点 白磁皿1点 その他不明	79~81	79~81	—
	暗茶色土層	10/12	土師器2点、青磁3点 白磁2点、青花5点、 近代陶器4点	16	不明	—	—	—
	暗黄色土層	10/12	青磁1点、近代陶器2点	3	不明	—	—	—
	暗黄色土層一括	10/15	土師器1点、青磁2点、 白磁8点、青花16点、 近世陶器7点	34	青磁皿1点 その他不明	82	82	—
	暗黄色土層	10/17	土師器21点、白磁1点、 瓦質土器1点、タイ産陶器1点	24	土師器底部1点 白磁皿1点	83	83	—
	1	10/17	青磁	1	碗	—	—	—
	2	10/17	瓦質土器	1	すり鉢	—	—	—
	3	10/17	タイ産陶器	1	甕胴部	—	—	—
	4	10/17	近世陶器	1	不明	—	—	—
	5	10/17	青花	1	不明	—	—	—
	6	10/17	青花	1	不明	—	—	—
	7	10/17	瓦質土器	1	羽釜	—	—	—
	8	10/17	土師器	1	皿	—	—	—
	9	10/17	土師器	1	不明	—	—	—
10	10/17	青花	1	不明	—	—	—	
11	10/17	瓦質土器	1	不明	—	—	焼成が甘い	
12	10/17	白磁	1	底部	—	—	粗雑	
13	10/17	青花	1	底部	—	—	—	
14	10/17	近世陶器	1	不明	—	—	—	
暗黄色土層	10/18	土師器14点、青磁4点、 白磁7点、青花12点、 タイ産陶器1点	38	土錘1点 白磁碗1点 その他不明	—	—	—	
暗黄色土層	10/24	白磁2点、近世陶器2点	4	不明	—	—	—	

発掘区	取り上げ番号	日付	内容	点数	器種	実測図番号	写真番号	備考
T 1 9 0 2	表土	10/24	青磁2点	2	不明	—	—	—

発掘区	取り上げ番号	日付	内容	点数	器種	実測図番号	写真番号	備考
T 1 8 0 4	表土層	10/26	土師器1点、青磁3点、 白磁3点、青花4点、 タイ産陶器1点、木炭1点、 近代陶器11点	24	白磁皿1点 その他不明	—	—	—
	黄褐色土層	10/29	青磁1点、青花1点、 竹炭6点、近世陶器6点	14	不明	—	—	—

発掘区	取り上げ番号	日付	内容	点数	器種	実測図番号	写真番号	備考
T 1 8 0 5 拡張	表土層	11/16	土師器2点、青花2点	4	不明	—	—	—
	表土層	11/20	土師器14点、青磁6点、 白磁2点、青花3点、 瓦質土器6点、木炭2点、 近世陶器4点	37	土師器皿1点 青花碗1点 火舎1点 その他不明	—	—	瓦質土器は 焼成不良
	表土層	11/26	土師器3点、青磁2点、 白磁4点、青花1点、 瓦質土器1点、タイ産陶器1点	12	青花碗1点 その他不明	—	—	—
	茶褐色土層	11/26	土師器19点、青磁1点、 白磁1点、青花1点、 瓦質土器1点、鉄滓1点	24	不明	—	—	—
	暗黄色土層	11/29	青磁2点、木炭4点	6	不明	—	—	雷文あり
	表土層	11/29	土師器30点、青磁2点、 木炭9点、近世陶器1点	42	不明	—	—	—
	黄土色土層	11/30	土師器12点	12	皿3点	—	—	ローリング
	黄土色土層	12/5	土師器1点、青磁1点	2	不明	—	—	—
	15・明茶色土層	12/14	瓦質土器1点	1	すり鉢	—	—	—
	16・明茶色土層	12/14	瓦質土器1点	1	不明	—	—	—
	17・黄土色土層	12/14	近世陶器1点	1	不明	—	—	—
	18・黄土色土層	12/14	青磁1点	1	不明	—	—	—
	19・明黄色礫層	12/14	瓦質土器1点	1	羽釜	—	—	—
	20・明黄色礫層	12/14	青磁1点	1	不明	—	—	—

発掘区	取り上げ番号	日付	内容	点数	器種	実測図番号	写真番号	備考
廃土	廃土一括	1/30	土師器2点、青磁3点、 白磁5点、青花6点、 タイ産陶器1点、近世陶器7点	24	不明	—	—	—

## 第5章 総括

### 第1節 第5次・第6次発掘調査成果の整理

本報告書において、最も重要な成果は横堀・土塁・犬走りの3点に関する所見である。本節ではそれらを中心に、第5次発掘調査所見とそれに対する史跡棚底城跡整備検討委員会等の指摘、第6次発掘調査所見の整理を行いたい。

第5次発掘調査において、T1701とT1703で横堀が箱堀形状であることが追認された。特にT1703では小礫による列石を遺構と認定し、その周辺に主に15世紀後半から16世紀頃の遺物が出土したことから棚底城に伴うものとしている。横堀が埋没した後に形成された面に列石遺構が検出されたことから、横堀は廃城後に埋めたのではなく、棚底城利用時に埋められ、表面は石列等を伴う帯曲輪面として機能していたという所見である。なお、埋めた年代はおおよそ15世紀前半までとし、土塁を取り崩して行われたと想定している。

これに対し、史跡棚底城跡整備検討委員会から「そもそも棚底城跡の存続年代は15世紀前葉から16世紀後葉であり、築城されてすぐに土塁を崩して堀を埋めるといのは考えにくい」、「堀底を通路として使用するのは防御の観点から考えにくい」、「遺物のみで判断するのではなく、出土状況等を踏まえて慎重に判断した方が良い」、「犬走りを遺構と認定して本当に良いのか。遺構だとして、その性格は何か」、「横堀の末端は整備するうえでも確定しておきたい」と指摘を受けた。

第6次発掘調査では指摘された点等を踏まえて調査を行った。横堀末端は薬研堀で、I郭側からの流れ込みによって埋没したものであった。また、土塁の末端は版築でなく、地山削り出しで形成されており、横堀と併せてI郭側からの切岸に合流するような形状をとっており、列石遺構もないことから通路としての利用も想定しにくい。犬走りについても第4章で既述したように、遺構ではない。I郭は現存している面積に加えて犬走りとされた部分まで広がっていた可能性が高く、図24に示したように切岸のラインが想定できる。岩盤を削った加工痕が残っている面の延長でラインを引いており、傾斜角は約65度である。以上のことから、「横堀は人為的に埋められておらず、I郭側からの流れ込みで埋没した」、「堀底を通路として使用した可能性は低い」、「犬走りは遺構ではなく、中世段階では露出していない」、「I郭は現存しているものより広がった」と結論づけ、現地において史跡棚底城跡整備検討委員会・熊本県文化課・文化庁の同意も得た。

T1805 拡張では横堀と土塁の末端を県内で初めて確認できたことも大きな成果である。棚底城跡は人吉を中心に治めていた相良氏の技術供与の可能性が

指摘されているが、相良氏領内の城跡で横堀や土塁の末端処理が判明している事例はない。

T1804及びT1902では遺構は認められなかった。特にT1902は大量の土嚢で埋め尽くされていた。これは、過年度調査の際に掘削した土を入れた土嚢と思われ、中に遺物が混入している可能性がある。したがって、整備を行う際には工事と並行して土嚢の撤去・土の洗浄を行う必要があることが分かった。

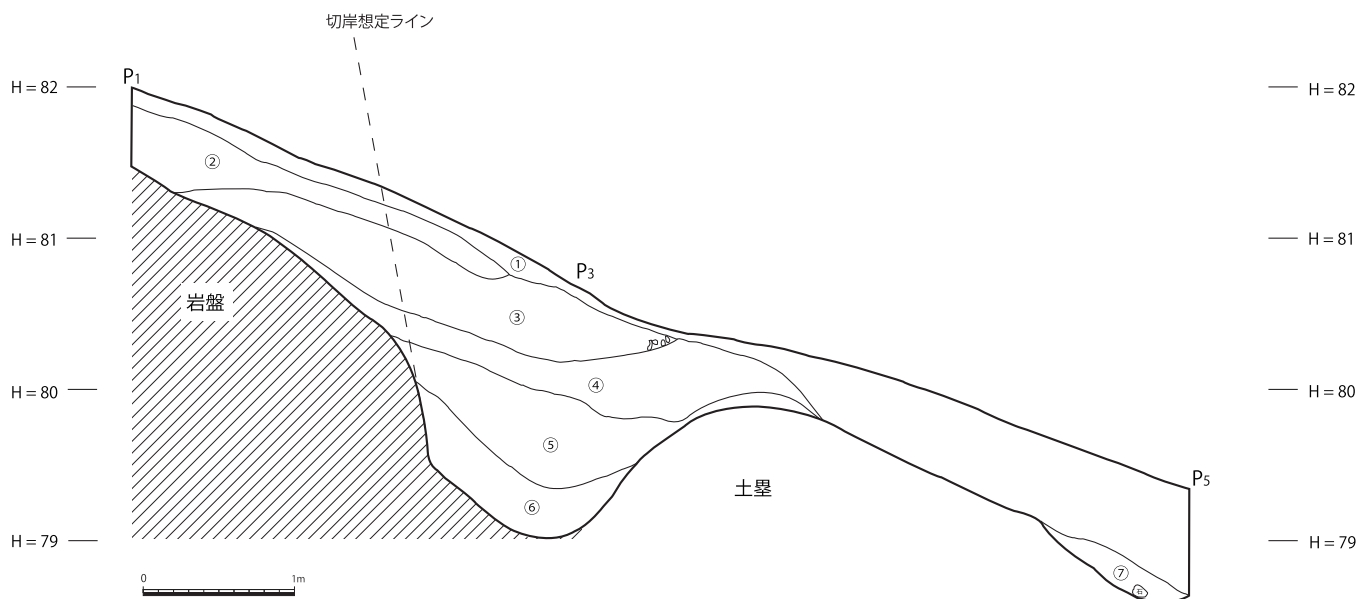


図 24：切岸の想定ライン

## 第2節 史跡整備に向けて

横堀と土塁は現地で平面表示を行う予定である。両方とも東側の末端は確認できたため、その成果を反映することができる。なお、土塁は末端については地山削り出しであるが、その他の部分は版築と想定されている。今次調査までの成果と併せると、版築と地山削り出しを併用していると思われる。整備計画では遺構を復元する予定はないことから、この点を追究する必要はないと考えられる。

虎口を確定することはできなかったが、現在の整備計画では虎口を再現するのではなく、階段を設置してダイレクトにI郭へ登れるように計画しているため、追究する必要性はない。T1902で土嚢が現在の地形に大きな影響を与え、誤解が生じる恐れがあることが判明したため、史跡整備に際しては土嚢を全て撤去する必要がある。

# 写真図版編





5次調査区全景（北から）



T1701 全景





上段横堀土層



上段横堀検出時 タイ四耳壺片出土状況



上段横堀内土師器出土状況



下段 横堀検出状況



下段 土塁検出状況





T1702 全景



II 郭曲輪面・帶曲輪接続通路部





石積遺構検出状況



割付線を持つ石材



石積遺構全景



遺物（青花）出土状況



T1702 と I 郭の位置関係





T1703 全景



Ⅰ 郭から見た T1703



遺物（瑠璃釉片）出土状況





上段 土罌・横堀検出状況



上段 タイ黒褐釉陶器片集中部



下段検出石列遺構と遺物（青花）出土状況



横堀内遺物（青磁碗・ウシの歯）出土状況



横堀内遺物（備前播鉢）出土状況





図 5-1

図 5-2

図 5-3



図 5-4



図 5-5

図 5-6

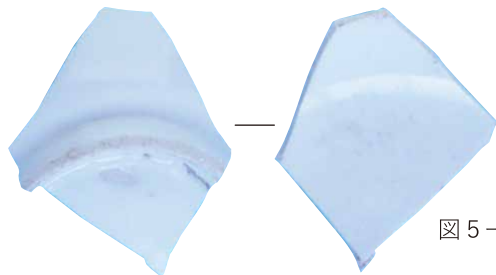


図 5-7

図 5-8



図 5-9

図 5-10

第 5 次発掘調査出土遺物



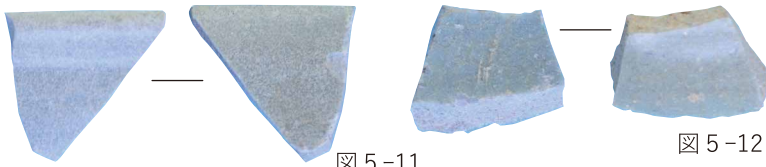


図 5-11

図 5-12

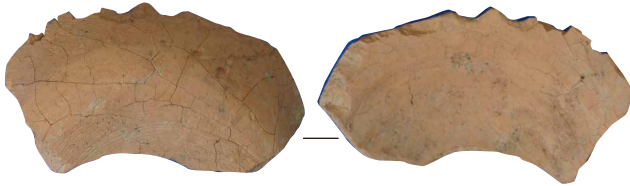


図 5-14



図 5-13



図 5-15

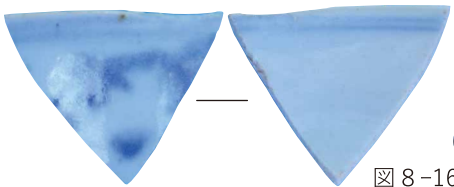


図 8-16

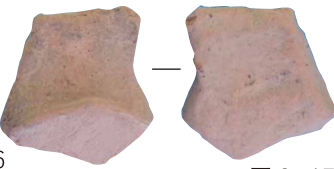


図 8-17

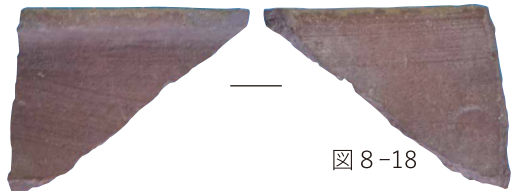


図 8-18

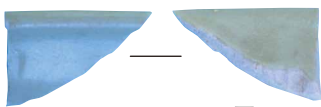


図 8-19

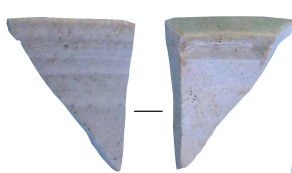


図 8-20

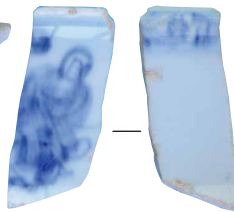


図 8-21

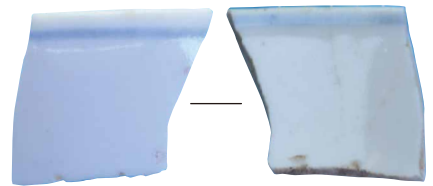


図 8-22

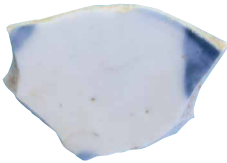


図 8-23

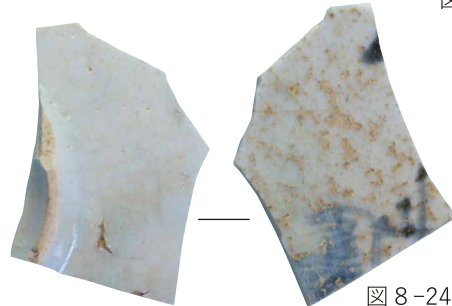


図 8-24

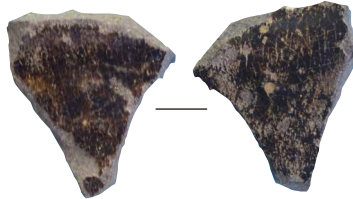


図 8-25



図 8-26



図 8-27



図 8-28

第 5 次発掘調査出土遺物



図 8-29

図 8-30

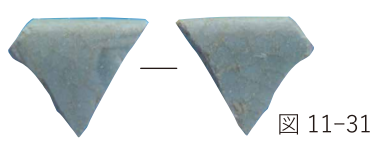


図 11-31

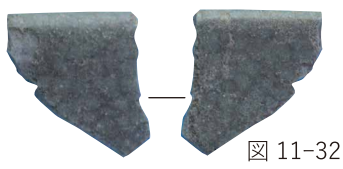


図 11-32

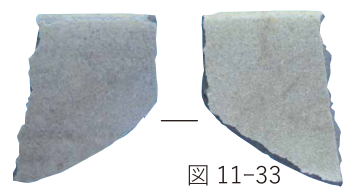


図 11-33

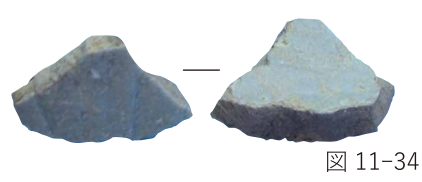


図 11-34

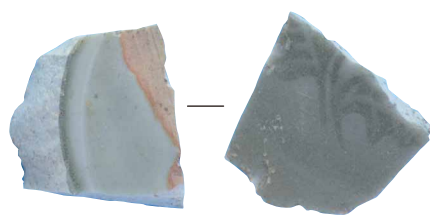


図 11-35

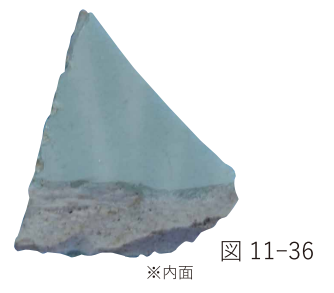


図 11-36

※内面

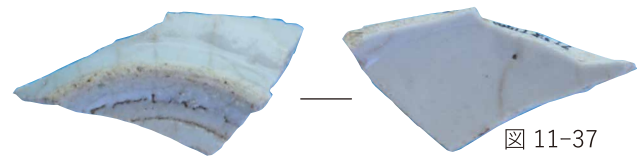


図 11-37

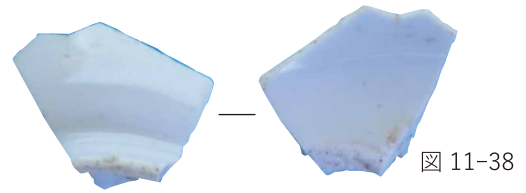


図 11-38

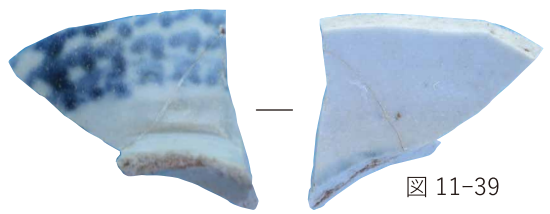


図 11-39

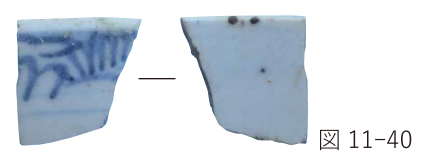


図 11-40



図 11-41

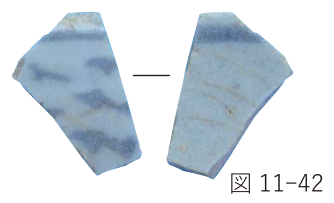


図 11-42

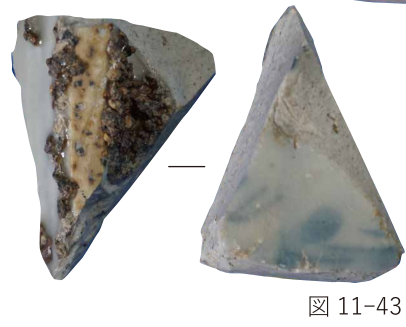


図 11-43

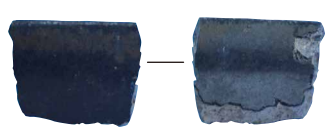


図 11-44

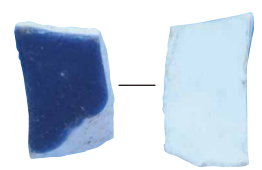


図 11-45



図 11-46

第 5 次発掘調査出土遺物





図 11-47



図 11-48



図 11-49

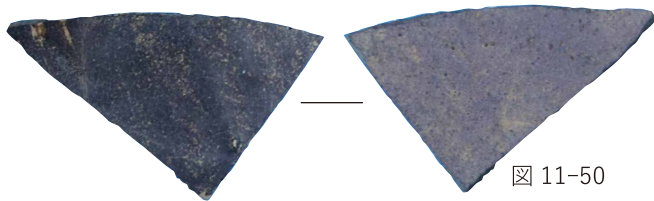


図 11-50

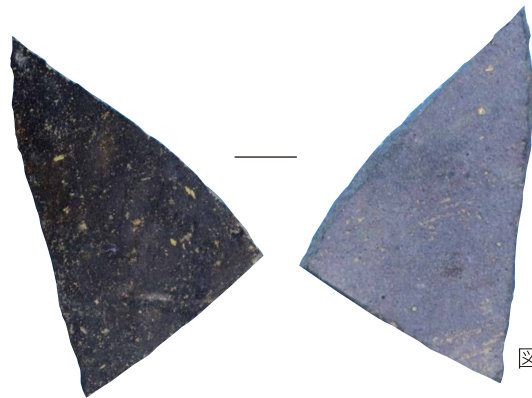


図 11-51

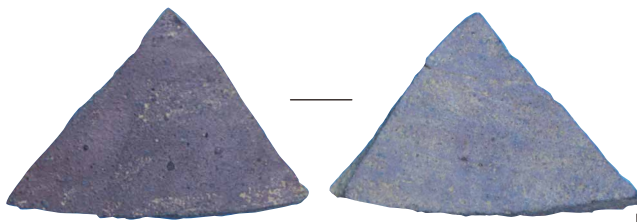


図 11-52



未実測タイ陶器破片

第 5 次発掘調査出土遺物



図 12-53



※耳部拡大

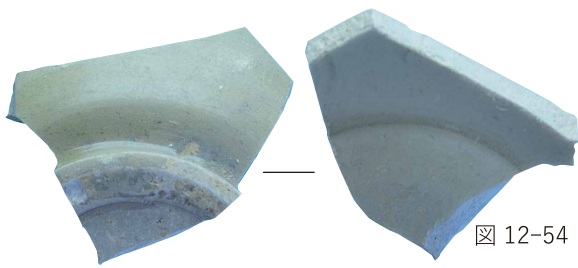


図 12-54

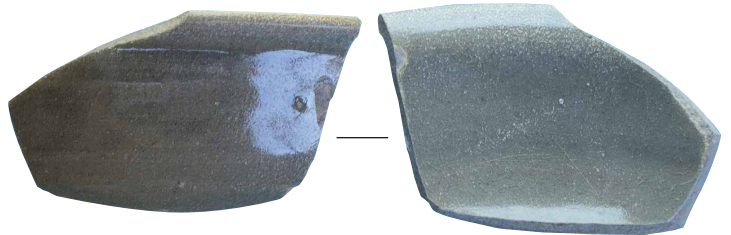


図 12-55

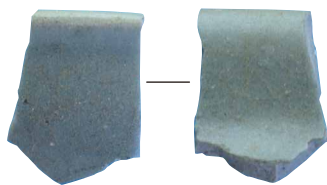


図 12-56

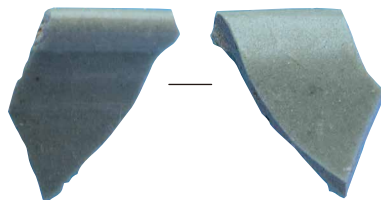


図 12-57

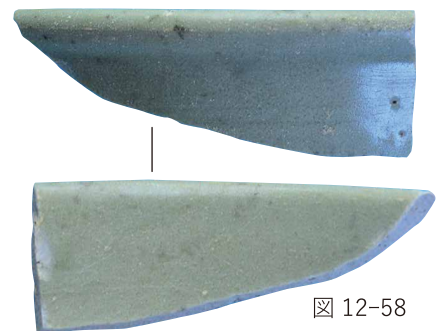


図 12-58

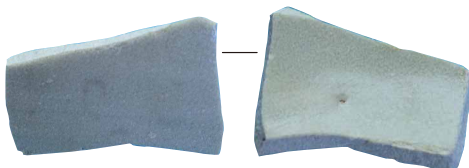


図 12-59



図 12-60

第 5 次発掘調査出土遺物



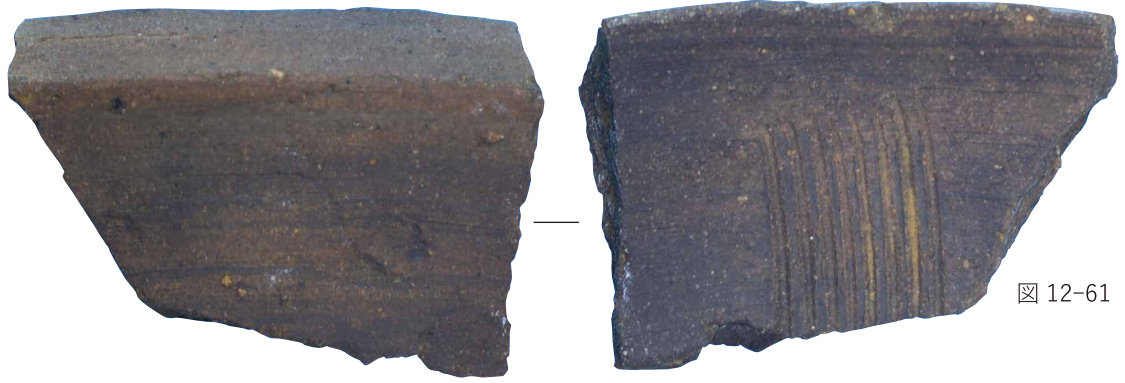


图 12-61

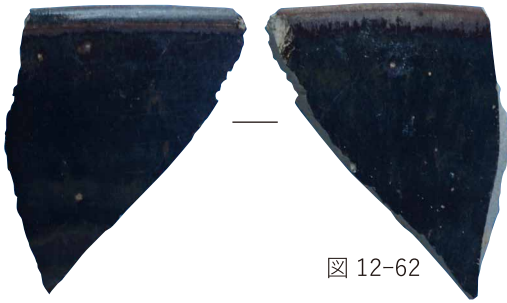


图 12-62

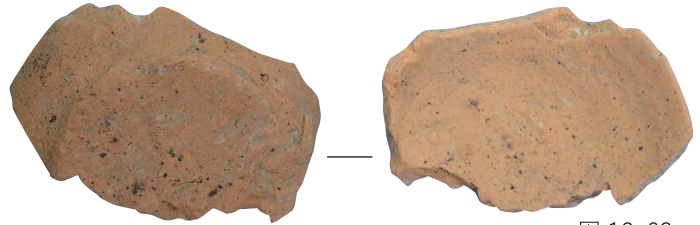


图 12-63



图 12-64

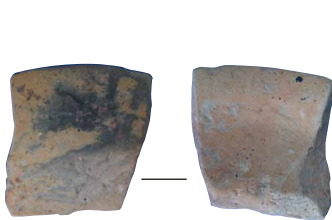


图 12-65



图 12-66

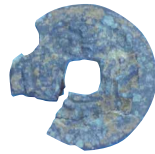


图 12-67

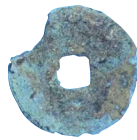


图 12-68



图 12-69



图 13-70



图 13-71



图 13-72

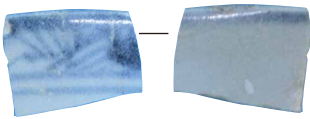


图 13-73

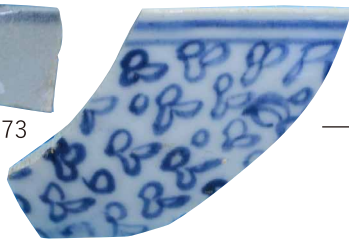


图 13-74

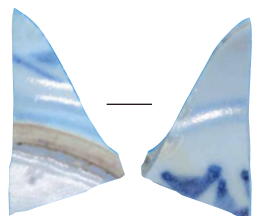
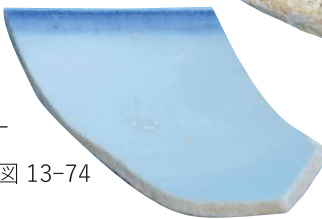


图 13-75

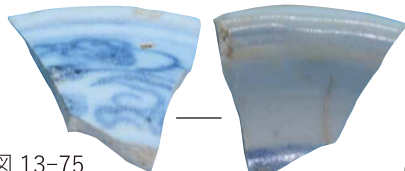


图 13-77

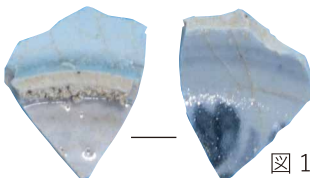


图 13-76



图 13-78



第 5 次発掘調査出土遺物





T1805 設定状況



T1805 拡張トレンチ完掘状況





T1805 拡張トレンチ北側土層



T1805 拡張トレンチ北側から





T1805 拡張トレンチ東側から



T1805 拡張トレンチ西側から





T1804 設定状況



T1804 完掘状況



T1902 設定状況



T1902 完掘状況

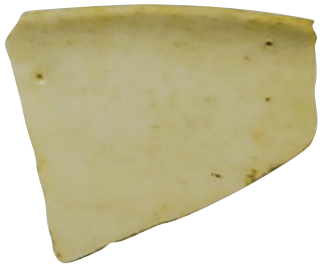


図 19-79



図 19-80

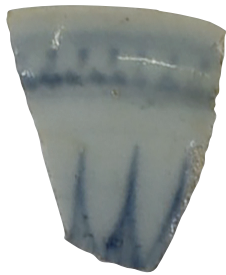


図 19-81



図 19-82



図 19-83

第6次発掘調査出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	くにしていしせきたなそこじょうあと							
書名	国指定史跡棚底城跡Ⅴ							
副書名	平成29・30年度発掘調査（第5・6次発掘調査）							
巻次								
シリーズ名	天草市文化財調査報告書							
シリーズ号	第9集							
編著者名	宮崎 俊輔							
編集機関	天草市教育委員会							
所在地	〒863-8631 熊本県天草市東浜町8番1号							
発行年月日	2021年3月24日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
棚底城跡	熊本県 天草市 倉岳町	43215		32度 24分 52秒	130度 20分 2秒	5次：2017. 12. 20 6次：2018. 10. 1 ～ 5次：2018. 3. 30 6次：2019. 1. 30	5次： 51. 60 6次： 51. 25	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
棚底城跡	中世城館	室町時代 ～ 戦国時代	5次：横堀、土塁 6次：横堀、土塁	土師器皿・青磁・白磁・ 青花・施釉陶器・ 瓦質土器・鉄滓等	
要約	<p>史跡棚底城跡は中世城跡で、「天草五人衆関連城郭群(仮)」の取組みの第1弾指定である。整備事業を行っている。</p> <p>第5次発掘調査では横堀と土塁、石積遺構を検出し、横堀の埋没年代や埋没後の堀底を通路として利用したという所見を出した。</p> <p>第6次発掘調査では第5次発掘調査所見の再検討も兼ねてトレンチを設定し、横堀の埋没過程を確認した。併せて横堀と土塁の末端を県内で初めて検出し、相良氏の技術供与を受けたとされる城郭において今後の参考事例となりえる成果が出た。また、虎口の想定地は土囊で埋め尽くされて形成されていたことが判明し、史跡整備を進めるうえでの留意点も浮き彫りとなった。</p>				

---

天草市文化財調査報告書第9集

## 国指定史跡棚底城跡Ⅴ

### 平成29・30年度発掘調査(第5・6次発掘調査)

2021年3月24日発行

編集：天草市観光文化部文化課

〒863-8631 熊本県天草市東浜町8-1

Tel. 0969-32-6784

発行：天草市教育委員会 〒863-8631 熊本県天草市東浜町8-1

印刷：トゥ・クリエイト